



# 本多猷下著書 (在庫品)

○法華經要義

定價金 參  
送料 拾四錢

○日蓮主義の本領

定價金 貳圓五拾錢  
送料 拾一錢

○日蓮主義の心髓

定價金 壹圓八拾錢  
送料 拾錢

○日蓮主義の精要

定價金 參圓五拾錢  
送料 拾六錢

○改聖語錄

定價金 貳  
送料 六錢

以上「教」發行所へ御申込に限り定價の一割引、外  
に要送料

施本用小冊子

○本感應妙を信じて

一冊八錢 送料三疊  
二 送料三疊

○法 國 冥 合

同 前

東京市外南品川町妙國寺内

## 「教」發行所

振替東京一〇九四〇番

昭和五年十二月一日發行  
第四百二十八號  
第四二十九號

## 目 次

如何にして濟はるべきか	本多日生
天風三萬里紀行(其十五)	小林日種
記事	
○大聖人六百五十遠忌	
○獨逸の野口上人	
○計開	
○各地教報	
○誌料領收	

第三十五年十二月號

料告廣一統		價定一統	
四分	一頁	一ヶ年	一冊
五分	一頁	金貳圓貳拾錢	金貳拾錢
九圓	拾五圓	送料共	送料五厘
圓	圓	事之金前	事之金前

昭和五年十月廿四日印刷納本  
昭和五年十一月一日發行  
神奈川縣横浜市磯子區磯子町廣地一四八  
(第四百二十八號)

不許複製

編輯人 磯部滿事  
發行人 鈴木日雄  
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地  
印刷所 東京都印刷所  
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所  
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ  
振替東京五一〇七一番



# 如何にして濟はるべきか

大僧正 本多日生

本日は「如何にして濟はるべきか」と題して、吾々が佛法を信じて濟はれるといふことはどういふ意味であるか、濟はれるといふことの意味合と、どうしたならば濟はれるのであるかといふ濟はれる方法とに就て、佛法の教へる所を御紹介しようと思ふのであります。

能く近頃の人々も、宗教に依つて濟はれるといふ言葉を使ふやうであります。その濟はれるといふ意味合はどういふ事を指して居るのか、ハッキリしない所があると思ふのであります。いろいろ間違つた意味の濟はれる方、又は漠然たる救済といふ言葉は世の中に澤山用ひられて居るけれども、正しい意味の而も明確な救済といふことに就ての考は、割合にハ

ッキリして居ないかと思ふのであります。

そこでどういふ風なことが濟はれるといふことの正しい意味で、さうしてそれが明かになるかと申せば、佛法で言ふ救済といふことは、現在生活の上にては苦しみを濟ひ、又罪を濟ふ、この二つを人間が一生涯暮して行く間に於て根本より根絶してしまふことを、佛法では救済と言つて居るのであります。如何なる人でも一生を卒はるに就て、苦しみ、悩みといふことの根を断切つてしまふ、一つは罪惡の根を断切つてしまふ、随つてその人は洵に幸福な楽しい人生を送つて、さうして罪を犯さないで善根功徳の人となつて一生涯の暮を閉づることになる譯である、それがこの世に就て濟はれるといふことで



ある。如何なる人でも苦しみの根を断ち、又罪の根を断つて、楽しい人になり、善き人となつて生涯を日出度送る、これが現在に於ての宗教の救済といふことであります。

所がそれだけではまだ残つて居るものがある。といふのは人の靈魂は永遠に續いて行くものであるから、所謂死後の靈魂の行末といふことも済はれなければならぬ。それは佛法で言へば六道流轉と申して、地獄、餓鬼、畜生といふやうな所を歴廻つて苦しみを繰返して居るのでは何にもならないから、この六道流轉の迷ひを断つて遂に佛様の覺りに上ばす、其處は常樂我淨の世界と申して、モウ再び悪い事もしなければ苦しみもしない、永遠に幾萬年を経過しても再び苦しみ或は罪といふ生活には戻らない、絶對の幸福の境界に上ばすといふこと、これを救済と申して居るのであります。

即ち救済といふことはこの上も無い結構な事ナン

た、誰もそれを見ることが出来なかつたのであるが、それを龍女が言うて居る。「今私が寶珠を佛様に差上げたがそのお受取りになつたのが疾かつたかどうか」「非常に疾かつた」と皆が言うた。「それが能く眼に留まつたか」「どうもハツキリわからなかつた」その位では私が成佛することの速かさも見えまいから、私は今此處で成佛してあなた方に見せるけれども、それは異つた者がそこに出来たと思ふやうな間違ひがあつてはならぬから、瞬ぎをせずして我が成佛の速かなることを觀よ、尙これよりも速かならん」と言つて居る。非常にその間は短いもので、逆も一秒間ナンといふやうなものではない、一秒間を六十に割つたその一つだと言うたりするけれども、殆ど言ひ表はすことの出来ない速さを以て、吾々の臨終、所謂人生の命が終ればその次に於て佛様に成つて行くといふことを、これを速疾頓成と申して、非常に速いといふことを力強く佛法に於ては教へら

である、この世は一切の苦しみと惱みの根を断ち、罪と、障を受けるところの罪障といふものを断切つて、洵に楽しい且つ善き人生を送つてその幕が閉ぢる、人間の果報が終つて死に直面すれば直ぐその瞬間から、そこには一分間の餘裕も置かずして、茲に命終りを告げれば直ぐそれに續いて永遠の覺りに向つて行くと言ふ、それを刹那成道と申して、その間に時間の間隔を見ないのであります。法華經の提婆品に於ては、龍女が成佛の速さを表はす時に、龍女が寶珠を持つて來て佛様にこれを差上げた、佛がその寶珠をお受取りになるのが疾かつた、まるで人の眼に留まらぬやうに、龍女がこれを捧げたかと思ふとすでに佛様の手にその寶珠が移つて居つた、どうしてその寶珠が佛様の手に移つたか、ちやうど巧な奇術師が、右の手に品物を持つて居つたかと思ふと知らぬ間に左の手に入るが如くに、どうして龍女の手にありし寶珠が佛の御手に移つたかわからなかつ

れて居る譯であります。

その救済がこの世から後の世に續き、後の世に於ては今申す通りに永遠の生命が再び迷ふといふことも苦しむといふこともなく、佛様の覺りにまで上つてしまふことを、これを佛は衆生濟度と言うて居るのであります。だから人生の苦しみといふ中には病氣の苦しみもあるし、求めて得ざる苦しみといふものが澤山ある、どの苦しみでも皆佛はこれをお濟ひになる譯であるけれども、普通の人が考へて居るやうな皮相の事で佛法は救済といふことを觀ないのである。「それ御覽なさい、信心したら今迄病身であつたものがこの頃は大方丈夫になつたぢやないか、身も瘦せて居つたのが肥つたぢやないか……」などと

言つてそれが御利益だと言ふ、それは御利益の一小部分には違ひないかも知らぬけれども、さういふ事を言ふと本當の有難味がわからなくなる。救済とは苦しみの根本よりこれを除き、罪の根本より除い



て、さうして人生の生活に於ける完全なる法悦を興へるものぢやといふことに力を入れなければならぬから、病氣を癒すナンといふことはまアどうでも宜いといふ議論が出て来る、さうすると受ける方が慾望が小さいものであるから、「病氣が癒らぬ位ならば信心しますものか」と言ふ、さうして少しの病氣を癒して貰つたならば「こんな有難いものはありませぬ」と言つて、眼が眩んで居る者が一バイ世の中に出来て居る。法華宗などもその方かも知れない。この間も佛立講といふものが非常に東京に蔓つて運動會などをやつて、お婆さんや娘が腰巻を出して競走をしたりして居るといふことも、何も知らぬ人から見ただらば、ア、さうも法華の御利益はえらいものだ、お婆までが駆出すやうなことになつたと言つて居りますけれども、それ等はやはり本當の宗教の味ひを知らぬものである。モウ少し能く了解して信心をしなければならぬ、さもなければ本當に濟はれた

といふことにはならぬ。佛が救済の事に就て大慈大悲の光を放たれる有様を見ると、毒量品の自我憐には、  
「我諸の衆生を見れば 苦海に没在せり」とあります。佛が御覧になると、多くの衆生は苦しいの海に没在と言つて溺れてアツプ／＼して居る。ちやうど可愛い子供が激流に没つて、或は浮び或は沈みして行くのを母親が陸の上から見て居れば「ア早く救つてやりたい」と思ふと同じ事ぢやと仰しやつて居るのである。それは病氣に罹つて居る者だけ言ふのではない、人生はどんな健康な人でも、どんな富める人でも、學者でも大政治家でも、人間である以上は、如來の御眼を以て御覧になれば、皆苦しみの海に没在せる憐れな子である、病氣に罹つて居る者だけが憐れで、壯健な者は佛様の御厄介にならない……それでは宗教といふものは成立つて來ない。モウ一つは結經の中に、

「一切の業障海は皆妄想より生ず」

と説かれて居る、業障の海といふのは即ち惡業の障りと書いてある、略して言へば業の海である。苦しみの海業の海に浮きつ沈みつして居るところの、苦海業海の衆生を救つて船に乗せて安全な所へ渡してやるといふことが、衆生濟度といふことである。これは如何なる者でも業がある、鬼婆だけが業の人といふ譯ではない、どんな花のやうな娘でも、一切衆生である以上は皆惡業煩惱の業海に沈淪して居るのである。

それはどういふ關係になつて居るかと言ふと、佛法の原則としては、人間の煩惱と、惡業と苦しみといふものが始終關聯して、これが輪の端無きが如くに繋つて行くのである。小さな輪でも輪といふものはグル／＼廻つたならば果しが無い、自動車の輪でも小さいものだけでも、グル／＼廻つて行けば横濱でも箱根でも何處へでも行ける、滾車なら滾車が

東京驛から出て行く、車輪は小さいものであるけれども、グル／＼廻つて居るから、東海道から山陽道下の關の端までも行ける、それから先は海があるから行けぬけれども、モット陸が續いて居れば歐羅巴までも行つてしまふ。吾々の業海或は苦海といふもの、流轉して居ることは輪の如きものだと佛様は仰しやる、それは非常に可哀さうなものである、子供などが車に轢かれて頭を打たれて、その儘ゴロ／＼何處でも繰返して引摺られて行くやうなものであるから、あゝ可哀さうだといふことが能くわかる。大きな工場へ行くときよく機械などに挟まれてグル／＼廻ることがある、大騒ぎをして卸してやらうとしてもナカ／＼取れない、そんな事を何處も繰返して居つたならば如何にも可哀さうなものである。どうしてもそのグル／＼廻る所からこれを取つて除いてやらなければならぬ、それが救済といふことである。病氣に罹つてその病氣が癒つたと言つても、モウ一



つ大きな苦しみの輪に引掛つてグル／＼廻つて居る、その大きな根本から説き教へるところの佛法の濟ひを認めなければならぬのである。餘は間に合せの宗教だから、お禁厭みたやうな事をしてフツと吹いて「これで火傷が癒りました」とか、或は斯ういふ御祈禱をしたら幸福が來るとか、いゝ加減な事をやつて居る、それは皆人間の迷ひであつて決して尊いものではない。

そこで其の輪はどういふ工合に繋がつて居るかと言ふと、苦と業とさうして其の前に第一に煩惱といふものがあるのである。煩惱といふのは心の迷ひである、正しい本當の考を壊すものを煩惱と言ふのである、それが心の中にモヤ／＼して居る、此處から仰々問題が出發して行くのである。この煩惱といふものが動くから悪業が起る。煩惱にもいろ／＼あるけれども、先づ腹を立てる煩惱を考へたならば、「おのれ憎い奴だ」と思ふからして、向ふの頭を打割

つてやらうといふことになつて行くのである。憎いといふことでなくても、近頃新聞に出て居るやうに、何とかして錢が欲しいものだと考へる、隣家の親爺が貯金をして居る、彼奴をごまかして一つ奪つて酒を飲んでやらうと考へる、さういふ人の錢を奪つて酒を飲もうといふ煩惱が出て來る、そこで江の島に伴れて行つて崖の高い所から突き落すといふやうな事をする、それはやはり煩惱が業といふものになつて現はれて來るのである。さうするとさういふ事をしたが爲に、一時はわからなかつたけれども、遂にそれが發覺をして捕まつて牢屋の内に放り込まれることになる、これがだん／＼進んで行けば刑務所に送られて、さうして裁判の結果は死刑といふことになつて絞首臺に上げられる、その上げられる時だけが苦しみではない、俺はどうしてもあの遣り方が悪かつた、幾ら嘘を吐いて通れようとしてもいろ／＼の證據が擧つて來たし、これは裁判の結果どう



一旦人間が悪くなり掛けたら逆も上つて來られないものである。それは監獄へ入つて居るやうな人の前途を見れば能くわかる。世間の事でも同じことだけ

しても死刑にされるに相違ない、眼が覺めてもそれを考へ、寝ても考へるから、一切の楽しみといふものは無くなつて、寝ても醒めても苦しいといふことになるのである。それは刑務所へ行つて本人に聽いて見なくとも大抵わかつて居る、俺はモウ死刑になる、あゝ良い氣持だといふことは言はないにきまつて居る。さういふ風にあらゆる事柄に於て煩惱といふものが業を犯し、業があると苦しみ、苦しむと又煩惱が多くなるといふ風に繰返して行くのである、實に嫌やな事である。あの男も生活が苦しくなかつたならば決して隣家の親爺を突落しはしないのだけれども、詰り貧しいといふ事があり、さうして人生の幸福を味ふことが出來ぬから、隣家の親爺の貯金を盗んでそれで一杯飲んでやらうといふので、苦し紛れに煩惱といふものが起る。

斯ういふ風に煩惱と業と苦といふものがだん／＼互に原因結果を成して繰返して行くのであるから、

れども、世間の事ではその因果の關係がさう綿密にわからぬ、隣りの嫁さんは性が悪くなり掛けたと言つたらナカ／＼これは直るものではない。性が悪くなり掛けたら悪い事をする、悪い事をすればいろ／＼困ることが出来る、困るから尙性が悪くなるといふ風に、だん／＼速度を増して、グル／＼と廻り方が速くなつて來る、所謂加速度的なものである。人間の悪くなつて行くのでも、終ひはど激しく悪くなつて行くのである。高い所から物が墜ちて來るのでも、初めはソツと墜ちかけたやうでも、だん／＼早くなつて、終ひには唸りを切つてビューンと墜ちて來る。それと同じやうに吾々が悪業を犯してだん



／＼に沈淪するといふのも、百三十六地獄の一番底の無間地獄の底までズドンと行かなければ気が済まぬやうに、唸りを立て、墮ちるものぢやといふことが考へられるのである。佛様の仰しやる通り、物の道理はさうしたものである、悪くなり掛けたら途中では止まらないものである。其點が實に恐しい、一步千里といふやうな言葉があるが、物の間違ひでもその出發點が實に恐しいものである。若い娘が淪落の生活に墮ちて行くのでも、初めはカフェエの女給などになつても、巻煙草を喫ふのでも羞しさに赤い顔をして居るが、それが僅かの間にさういふ墮落した生活の中に墮ち込んで行くと、一年もすると今度は人の前でも平氣の平左でどんな事でもやるやうになる。新聞などに載つて居る女の墮落、女の犯罪といふやうな記事を見ると、皆さういふ傾向を辿つて居る。それはさういふ事だけでは無い、すべての事柄に煩惱、業、苦の關係といふものがあるの

ある。そこで斯ういふ苦しみの海、惡業の海に沈んで居る者を救ふには、この煩惱といふ心の中のモヤ／＼を霽らすといふ事から行かなければならぬ、この點に、佛は眼をお着けになつたのである。たと苦しみを濟ふと言つて見ても、煩惱といふものが治まらない限りに於ては何遍繰返しても同じ事である。そこでその煩惱を癒す方法といふものは、一つはその人間に能く了解を與へることである、今私がお話をし居る事でもやはりそれに役立つ譯であつて、人間は煩惱といふものを注意しないと何處までも恐しい事になる。世の中に怖い者は化物でも鬼でもない、閻魔様が怖いのもなければ、青鬼が怖いでもない、自分の心の中にかかる煩惱、それが恐しいのである。鬼が追掛けて來居るのではない、自分の煩惱が鬼を呼ぶのである、自分の方から電話を掛けて「どうぞ來て下さい」と言ふから、「待つて居れ、今行つてや

る」といふので向ふがソロ／＼出掛けて來る譯である。そこを能く了解しなければならぬ、恐るべき物は外にあるのではない、汝の心の中に汝を苦しめる物がある。随つて汝を濟ふ力といふものは、やはり汝の心の中にこれを求めなければならぬ。その心の事を考へて見ると、これは非常にエライ力を有つて居る、少しも失望落膽することは無い。人間は煩惱も強いし、惡業も強いけれども、その反對に煩惱に打克つやうな清い精神、これを淨心とも眞心とも申して居りますが、洵に淨い立派な精神が人間にはある、さうしてそれがナカ／＼力強いものである。煩惱も猛烈であるけれども、それに敗けない力を有つて居る、そこが又人間の有難い所である。どんな罪惡な者でも、例へば非常に性の悪いお婆さんでも、まるつ切り鬼婆といふものは無い、そのお婆さんの心の中にはナカ／＼又優しい立派な考を有つて居るものである。たゞチヨット拗けた

癖が附いて居るのであるから悪い方ばかりが出るのであるけれども、その心を一轉すれば優しい立派な心を有つて居る、だからそのお婆さんの氣に入つて居る娘とか孫とかに出會へば、そのお婆さんが一遍に優しい人になつてしまふのである、外の者に對しては鬼婆でも、可愛い、娘とか孫の爲には佛様と同じやうな精神が現れて來る。さういふ人は澤山ある、鬼婆のやうに言はれる人でも、孫の顔を見ると「オ、よく來たナ」と言つてニコ／＼する、その變化が激しいものである。そこが面白い所であり、有難い所である、人間の尊い所はそこに在るのであります。そこで佛様の事に觸れてその優しい考を喚起することを佛教では教へたものである。お婆さんには孫さへ向ければ宜いやうなものだけれども、何時も孫が居る譯には行かぬ、孫の無いお婆さんもある。併し佛様の教に來れば、何とも言へない優しい、如何



なる者でも自分の優しいお母さんに會うたやうな心を有つことが出来る。お婆さんになつてもやはり心が淋しい、頼りないといふ所から根性が拗けて來るのである、亭主も死んでしまふし、息子は嫁に奪られてしまひ、だん／＼自分の幸福は無くなる、花を見に行かうと思つても腰が痛い、御馳走を食べようと思つれば齒が無い、考へて見ればい／＼／＼しいといふやうな事になつて、その不平不満を嫁の方に集中して行くから面倒が起る譯である。そこで自分も娘であつた時分に優しい母に慰められたやうな心持が、宗教に來れば何時でも與へられる、お釋迦様はお婆でもお爺でも、汝等は憐れな可愛い子である、「皆是れ吾が子なり」と仰しやる、お婆さんは子ではないと仰しやらない、頭は禿げても子である、一切衆生皆是れ吾が子なりといふ優しい考を有つて吾々を護つて下される意味合が、その信仰の話を聽いて居れば能くわかる、わかるからさういふ温か

なものに向へば、今まで隠れて居た優しい考が勃然として起つて來る。それが起らぬやうな人は、罪障が深くして所謂發心信仰の縁の無い人といふので、縁無き衆生は度し難しと言つて、どうせそれはその儘青鬼の方へ送り届ける譯になる、これは跳いても跳いても仕様がなない。ナンボお寺の和尚がうまい事を言つて、「あなたはキツト濟かります」と言つても、和尚の證明などは三文の價値も無い、それはたゞお上手にそんな事を言ふのである。本當に因果應報の理に於てそれが認められなければ何にもならぬ。

さういふやうな優しい考がそこに浮いて來て、さうしてそこに信心が成立つのであります。簡単にこれを淨心とか真心とか申して居るのであるが、その信心が一つ起れば煩惱といふものが鎮まつて來るし、惡業といふものが無くなり、苦しみといふものにも對抗する力が出て來る、非常に強い力がそこに

現れて來る。そこでその信心を堅固に維持しなければならぬ、信心が弱いものであれば何の役にも立たない、其點が大事な所である。日蓮聖人の言葉を藉りて申せば

「我が不信を以て金言を疑はされ、信心強盛にして深重ならば……」

といふやうに、信仰といふものは本當の強い力を有つて居らなければ何の役にも立たない。何事をやつて居つても、この苦しみと罪といふものゝ爲に動かされてしまへば何にもならない。所が人生の苦しきといふものもナカ／＼猛烈なもので、平生日頃は苦しみに出會うても敗けないやうに切り開くと決心して居つても、苦しみの方が猛烈に來るから、遂に信仰が壞られるのである。惡業、煩惱といふものも内からも起るし、外からも輸入して來るものだから、その強い煩惱の力に征服されて信仰といふものが敗けてしまふのである。一旦信心して居るやうに見え

て、歲月を経るに従つてその信心が伸びて行くかと言ふと、却つて生にえになつてだん／＼信仰が頽廢して行く、それは本當に信仰の意味合に徹底して居らぬから起る事である。信仰といふものは何時でも潑刺した力を有ち、堅固な力を有つて居らなければならぬものである。その代りそれ一つあれば今言ふ通り人生のすべてを満たし、永遠を濟ふところの強大なる力を有つものである。

日蓮聖人はそれを誦められて居る、惡世末法の時代といふものはだん／＼信仰を亂すやうな事柄が多くなるから、信仰の力に依つて苦しみを切り開き、罪を免れようとするには、餘程堅固でなければならぬ。恰も強い火になつて來ると鐵でも熔けかける、鉛のやうなものならば無論火の中へ入れれば直ぐ見うになつてしまふ、鋼鐵は少し遅いけれどもそれでも熔ける。あの嶺山で鋼とか鐵とかいふやうなもの



を製造して居る所に行つて御覧になれば、石も鐵も皆熔けてドロ／＼になつて居る、何千人といふ職工が山から固まつた鑛石を掘つて来る、それをトロッコに載せて持つて来ては、その火の燃えて居る中にドン／＼と放り込む、さうすると石も鐵も皆一緒になつて熔けて、鐵は重いから下の方から流れて出る、石は軽いから上の方から水になつてドツと流れて居る、その儘放つて置くと固まつて大きな岩が出来てしまふから、その石が熔けて出る下に水がドン／＼流れて居る、その水の中にシュツ／＼と落ちるから、水の中で冷えてその石の熔けたのが小さい石の鉄片みたやうなものに固まつてしまふ。それを外へ持つて行つては棄てるのでありますが、その石を熔かすのもやはり石炭で熔かす、その石炭の火力を強くする爲に太い鐵管から瓦斯を送つて、その中に粉末にした石炭を送る、その粉になつた石炭が爐の中に入ると火になつてバツト燃える、それで遂に石をも熔

かし鐵をも熔かすのである。それを日蓮聖人が言はれる、末法に處する吾々は、その鐵をも熔かす爐の火の中に放り込まれたやうなものであるから、なまぬい信仰では熔けて皆流れてしまふ、その熔々と燃え立つて居る熔鑛爐の火の中にも尙熔けないぞといふ鞏固な決心を以て、信仰を維持しなければならぬ、それには日蓮を根本にせよと仰せられるのであります。非常に恐しい話であるけれども、併し人生の實際はさういふ恐しいものである、信仰は兎に角強い決心を以てやらなければならぬ。

或は又阿含經に説かれた譬喩も、六つの動物が各々自分の行きたい方へ動かんとして居る、これを一つの柱に縛りつけて置くのに、柱が弱かつたならば、あつちへ引倒され、こつちへ引倒されてしまふ譯である。その六つの動物といふのは、犬と狐と鳥と猿と鰻と蛇とに譬へられて居るが、これが各々行きたい所があつてその方へと動き出す、それをば

一つの柱に縛りつけて置くには、その柱が確かりし居らなかつたならば危ぶまないものである。近頃新聞にもあつたが、虎を汽車に積んで来た、その貨車の内に入れてある虎の檻が壊れた、若しも貨物列車をウツカリ開けて飛出したならば大變だといふので、六十人も巡查や何か鐵砲を持つて行つて警戒して、漸くにして新しい檻の中へ入れて淺草の花屋敷へ持つて行つたといふ記事があつたが、さういふ風に檻が確かりして居らなければ危ぶまない、その檻がやばいものであつて虎が飛出したならば大變な事になる。吾々が信仰を以てこの人間の心のいろ／＼に動かんとするのを引締めて行くのも同じ事である。腹が立つと云ふと辛抱が出来ないやうに出て来る。「信心も何もない、モウ斯うなつた以上は……」と言つて綱も振切らうとするでせう。或は悲しいといふことに就ても、何と言はれても諦めが附かぬと言つて眼が眩むやうになる。そこを切り開いて行か

なければ何にもならない、實戰に臨んだ時に敗北する位ならば信仰の無い人も同じことになる。

近頃軍備の問題に就てやかましい話があるが、或る國と若し戰をして敗ける位なら、ナニモいろ／＼の武器などを備へて軍人に月給を拂つて訓練をして置く必要はない、いよ／＼戰爭が始まつたならば敗けないといふのでなければならぬ。尤も戰爭がある迄はまだ大分年月もあるから、その間月給を貰つて、いよ／＼戰爭が始まる頃には辭職してしまへば安心だといふならば、それはそれでも宜からう、けれども實際の戰爭に敗けないといふのでなければ軍備の用を成さないといふことを言つて居る人があるが、これは私は尤もな事だと思ふ。又陸軍などの訓練でも、傍から見れば居ればおかしき位にやつて居る、「右向け右ツ」といふやうなことを何遍でもやつて居る、あんな事はそんなにやらないでも、大きな男だから一遍教へれば宜いと思ふのに、毎日「氣を附けッ」



「右向け右ッ」とやつて居る。どういふ譯であんなに大きな聲で怒鳴るか、それはいよ／＼戦場に臨んで、砲煙彈雨の裡に自分の側に居る戦友がコロリ／＼と斃れて行く時分でも、「前へ進めッ」と言つたならば突進して行かなければならぬ、「前へッ」と言はれて後退するといふことになれば役に立たぬ。吾々が南無妙法蓮華經と唱へて居るのも同じ事である、どんな悲しい事が来ようが、どんな腹の立つことが来ようが、南無妙法蓮華經と唱へればそれが有効にはたらくやうにして居らなかつたならば、毎日百遍唱へた、二百遍唱へたと言つても何を言ひ居るのかわからない。その實際の場合に役立つやうにして置かなければならぬ。チア苦しい事が出て来た、自分の心に迷ひが起りさうだといふ時に、訓練して居る平生の信仰が役立つか否かといふことを試して行かなければならぬ。試して一通でも敗けたら自分の信仰は駄目である、平生は信者の中でも大きな顔

をして、世話役の方に廻つてやつて居るけれども、いよ／＼實戦になれば一番に逃げる組ちやといふことを以て自分が愧ぢて、信仰の力を養はなければならぬものである。ところが多くの人はその訓練が嘘である、たゞいゝ加減な事をして居つて、實際に臨んだならば敗けても何でもかまはぬといふのである。だからお婆さんが長い間お寺にお詣りして居るけれども、何でもない事に腹を立てたと言つたならば仕末が悪い、「あなたは信心をして居るではありませぬか」イヤ信心は信心、癩癩は癩癩ぢや……といふことになつては何にもならぬ。だからして軍隊の訓練はいつでも實戦のつもりでやつて居る、本當の戦のつもりでやらなければならぬ、その位やかましく言つても實際の戦争とは幾らか距離があるといふので、軍隊の訓練に於ては非常に困つて居る譯ナンである。宗教又は道德の修養訓練といふことも同じ譯であつて、實際の事に當嵌めて考へることが

極めて必要であると思ひます。

だからその試験の爲には少々は苦しい事や、嫌々な事に出會ふ方が宜いのである、必ず軍隊の教練でも、雪の降つた日とか、雨の降る日とか、風の日とか非常に辛いやうな時に行軍をして居る。それでなければ、天氣の好い日にばかり行軍をして居つては、いよ／＼戦に行つて、雪が降つたり、雨が降つたり何かしたら一遍に皆風邪を引いてしまつたといふやうなことでは何にもならぬ。やはり人生に於ても少くくらは嫌やなやうな事に出會す際にも、それは自分の信仰を訓練する好機會なりと思つて、喜んで行かなければならぬ。そのことは勝鬘夫人の話の中にも、苦しい事に出會ふと大變嬉しいと書いてある、信仰を訓練して行く上にそれが役立つから尚に有難い事に思ふ、煩惱が起つた場合にも、「こんな心が起つた」といつて吃驚はしない、「出て来たナ、茲だナ」と思ふから、煩惱が起つた場合にも人のやうには驚

かない、「待つて居れ……」と落着いて自分は信仰の力を試みるといふことが言うてある。これが婦人の信者の先輩である、勝鬘夫人は佛教を信する女性の手本と成つて居る人であるが、さういふ事を言つて居るのであります。

そこで信心は堅固でなければならぬ、その信力堅固なるもの、吾々をして現在には苦しみの海、業の海を渡らして呉れる、さうして救済の力がそこから出て来るのである。その信力堅固にして人間が苦しまなくなり、罪を犯さなくなれば、そこから未來の生活も覺りを開き、佛様のやうな廣大な功德を成就して行くのである。現在も未來も皆一つの信力堅固といふことに依つて濟はれる譯である。その信心さへ確かりして居ればそれ一本槍で宜いのである、宗教はその一本槍で行ける所が非常に良いのである。併しその一本槍の信心を強くするが爲には、説教を聽くのも信心を磨く所以であり、世の苦しい事に



會ふのもそれは信仰を鍛錬する所以であり、いろ／＼な誘惑に遭ふことも自分の精神を訓練する所以であるといふことになつて、一切の世の出来事を悉く取つて以て信仰の訓練の材料にする所まで行けば、それがえらい信者といふことになるのである。ところが何でもない事に一々自分の信心を壊して掛かる、チョットした誘惑に出會うた時分にも信心がぐらつき、チョットした苦しい事に出會うても信心に影響するといふ間は、それは駄目である。併し今迄多く一般の信者といふものは、所謂曇の上の水練のやうな訓練の仕方が多いやうに思ふのであります。だから僅かな心配な事があれば信心は欄に上げてしまつて狼狽へて、何にも事の無い平和無事な時だけ、天気も好し、気分も良し、家の用事も無し、今日は家でまご／＼して居つても欠伸をせんならんといふ日だけお詣りをする、今日は天気が悪い……今日は少し用がある……、少しの故障があれば月に

一回の講演會にも缺席をするといふのが普通の有様であります。本會などは出席率が非常に良いけれども、一般の婦人會などを見たならば、三百人ぐらゐの會員があつても集まる者は十五人ぐらゐしか無い、それもだん／＼に減つて十人になり、八人になり、終ひには五人ぐらゐになつてしまふ。それは今申す通り僅かな事情に依つて己れの精神が皆壊されるからさういふ事になるのであります。そこでその信心の内容といふものはどういふものであるか、これは詳しく語れば佛教信仰の内容といふものはナカ／＼面倒にも考へられませうけれども、極く大事なものを考へると二つである。信心／＼と言つて居ることはどういふ事を信するのか、信するといふことはモウこれに間違ひないといふことである、誰が何と言つてもこれはコツブである、コツブといふことに對して一つの信念を有つて居る、たゞ知るといふ以上に、コツブに違ひないと言ふ、人が

何と言つても「それは土瓶ではないか」と言はれても、「イヤそんな事はない、コツブだ」といふことをハツキリ言ひ得る、尤も場合に依つては口ではどうでも言へるから「その通り土瓶です」と言つたり、又「イヤこれは土瓶ではない、バケツだらう」と言はれ、ば、「さうです、バケツとも言ひます……」と言ふやうな場合もあるけれども、頭腦の中では「イヤこれは確にコツブだ」と考へて居る、その考は取れない、それは信念といふものである。佛教に於て二つの大きな信念を興へられたならば、人が何と言はうが、世の中に苦しい事が出来ようが、頭切られるからと言つてこのコツブが土瓶になる氣遣ひはないのであるから、「頭をどづくから土瓶にして置け」と言はれても、土瓶にして置くのはどづかれて痛いから言ふので、やはりコツブはコツブである。どんな事があつても忘れてはならない二つの大きな信念といふものを、佛教を信する以上は有つて居ら

なければならぬ。それは何かと言ふと、一つは心の事であつて、心の不滅、その心の力、これを佛法では「法」と言ふて居る、法といふのは自然の有様を言ふので、所謂自然法であります、人各々心といふものを有つて居る、これは拵へるものでもなければどうするものでもない、自然に人間といふものには心がある、その心といふものは滅びないものである、この心の不滅といふことを信するのであります。難かしい理窟はわからぬでも宜しい、人間は死んで靈魂が消えるものではない、どこ迄も續いて行くものである。さうしてその心にはえらい力を有つて居る、煩惱も有つて居るが、一方には尊い力を有つて居るものだといふことを信するのであります。「まアそれは佛の仰しやる事だからさうして置かう」といふのも宜しい、それは隨信行と申して、自分は佛を信するが故に、人は何と言つても、佛様が人間の靈魂といふも



のは滅びるものではないと仰せられた、その通りに  
靈魂は不滅なりと確く信じて疑はぬ、さういふ類の  
ものを隨信行と言ふのであります。

モウ一つの隨法行といふのは、それに就ての了解を  
加へて行くのである、了解は加へても加へなくても  
同じものである。了解を加へるといふのはどういふ  
事かと言ふと、一切の事柄は因果の關係に依つて存  
在して居るのである、即ち因は種であつて、果は出  
來上つたところの實であります。米なら米が茲に在  
る、この米といふものは、去年の秋穫れた方から言  
へばこれは實であります、併ながら苗代に蒔く時に  
於て言へば種であります。茲に一人の二十ぐらゐの  
女が居る、その女がお母さんと一緒にお詣りして居  
る所から言へばそのお母さんの子である、所が膝の  
上に抱いて居る赤ん坊から言ふとお母さんである。  
一人の女が子であり、母であるが如きものであつ  
て、一切の事柄といふものはこの因果の關係が實に

不思議な有様になつて居るのであります。それが普  
通の人は能くわからない、今言ふやうにお母さんと  
娘と子供を抱いて來て居る、この娘さんはお母さん  
から言へば子であつて、膝の上の子供から言へばお  
母さんである、斯う言へばそれだけはわかるけれど  
も、それもウツカリして居るとわからぬ位のもので  
ある。一切の事柄はそれと同じ關係のものである。  
能くこれは鶏の卵と鶏とに就て言はれる問題で  
あります、種といふ方から言へば卵である、鶏卵  
といふものは先づ種であります。この卵が孵つて鶏  
になる、大抵の人は鶏は卵から出來たとたゞ斯う  
考へて居る、併しその卵はどうして出來たか、それ  
は鶏が産んだ、その鶏はどうした、卵から孵つ  
た……さうなるとどつちが親か子かわからぬ。この  
卵の方から言へば鶏は親になつて居る、卵から鶏  
が孵つて居る方から言へば鶏の方が子になつて居る、  
そこが能くわからぬ、サアどつちぢや、能く考へて

御覽、鶏が先か、卵が先か……どこ迄行つてもわか  
らぬでせう。如何なる場合でも鶏は卵から出來た  
に相違ない、卵は鶏が生んだに違ひない、どつち  
が先かわからぬといふことになる。

そこでこれは普通の人が考へて居るやうに、因果  
といふものが、決して因が前で果が後といふ譯のや  
のではない。同時存在といふのであつて、どつちも  
存在して居るものである。卵が前でも鶏が前でも  
ない、どつちもある、どつちが親、どつちが子と言  
ふことは出來ない。これを本因本果と申すのであり  
ます、お釋迦様はそこを押へた、それが非常に大き  
な哲學上の根本觀念であります。お釋迦様が最初ま  
だ悉達太子として城を出られた時に迦藍阿羅邏仙人  
の所へ行かれた、所が迦藍阿羅邏が言ふには「人間  
は業から出來た」と言ふ、そこで悉達太子は「業は  
誰が作ったか」「それは人間が作った」「その人間は：  
」「業から人間が出來た。」「どつちが先ぢや」「そこ

が困る所でございませう、昔から吾々の先輩が皆困つ  
て居ります……」「先輩の困つた話などは聴かないで  
も宜い、お前は困つて居るのか、困らぬのか、」「私  
もやはり困つて居ります……」「そんな困つて居るや  
うな者を先生にする譯に行かぬ」と言はれて「左様  
なら」とも言はないで背を向けて立去つてしまつた  
といふ事が書いてある。お釋迦様が出家して即座の  
時でもその位のものである、實にお釋迦様といふ方  
は偉い方である。あなた方も今迄いろ／＼の事を考  
へて居るだらうけれども「卵が前か鶏が前か」と  
言はれたならば「サア……」頭ばかり傾げて居る、  
幾ら考へたつて落が着かないでせう、そこに廣大な  
真理がある。その事を蓮華といふものが代表して居  
るから、妙法蓮華といふ語があるのである、蓮華は  
蓮臺の中にチャンと實がある、花が咲いて居る時分  
にモウその中に實がある、その實を割ると内にモウ



チャント芽が出来て居る、花が咲いて居ると同時に實があり、實の中にチャント芽が出来て居るのであります。『因中果あり、果中因あり』と言つて、因果が今言つたやうな工合に双方に關聯して、因果同時といふことが明かになつて居るから、それで蓮華の譬を採つた譯であります。

左様な譯であるからすべての者は、今茲に現れて居る以上に於ては必ずそれに原因といふものがある、その原因がある以上は、その原因となるべきものにも亦更に原因がある。これをだん／＼追窮して行く時に於ては、凡そあらゆる物は茲に在る以上は、何等の原因をも問はずしてそのものは實在して居ると見なければならぬ。茲に現れて居るところの事實は、實際宇宙に存在する物が出て來て居るのである。卵だけが實在者であつて、鶏は影法師であると言ふ譯には行かない、形を現す以上は皆これ即ち實在者であると謂はなければならぬ。

い。無かりし物は無い物である、有りし物は有る物である、無き物を有らしむることを得ず、有る物を無からしむることを得ずといふことが眞理である。凡そ現實に有る物が無くなるだらうか、無くならぬだらうか、そんな事を心配するやうな不透明な頭腦は逆も話にならぬのである。だから佛様は靈魂は決して死んで消えてしまふものではない、この靈妙不可思議な尊きものは、一切の存在を超越した、すべての存在よりもモット確實なる存在として靈魂といふものを見なければならぬ。他の物ならば火に入れれば熱けるし、水に入れれば溺れるけれども、我が心といふものは、火も焼く能はず、水も漂す能はずのものにして、如何にも不思議な存在を有つて居るものである。さういふ風な眞理を一方に考へ、一方には佛様の尊いといふことを考へて、隨信行、隨法行共に併せて以て吾々の生命の永存して行くこと、並にその生命の内に含まれて居る力の尊いことを確

それ故に今人間の上へ心として現れて居るこの心は、別段何等原因を問ふ必要もなく、結果を問ふ必要もなくして、現在有りし儘に自然法と云ふものが存在して行くものと考へなければならぬ譯である。何れより生じ、何れに滅するといふものではない、生ずる所無く、滅する所無し、不生不滅、在りの儘に存在し來つて居るところの事實である。それを佛敎の語では本有と申すのであるが、本有と言へば本有常住と言つて本來から有りし儘に存在して居るものであつて、決して死んで消えて無くなるといふ譯のものではありませぬ。

一切の物何物と雖も、無い所から生ずるといふことは無い、随つて有りし物が無くなるといふことは、斯ういふ事はどうしてもさう考へなければ、一切の事柄は判斷が出来ないのである。何物も無い所から物が出来る、有る物がフイと無くなる、さういふ事を言つた以上は眞理といふものは考へられな

く信じて行くのであります。何と言つても我が心、我が命の不滅、さうしてそれに尊き大切な結構なものがあるといふことを確信することが佛敎の信仰内容であります。

その信念はモウ何處へ行つても動かされないのである、それだけは鐵の柱として置かなければならぬ。それにぶつかつて來るやうなものは木端微塵にしてしまふ、「人間が死んで靈魂が有るか無いかわからぬぢやないか」などと云ふ者があれば、「あゝ馬鹿な奴が來たナ」と思つて、少しもそれに對してこつちは動搖しない、「それはお前が智慧の方から言へば無智である、敎の方から言へば不信の者である、無智不信の輩である。我がこの佛様から與へられた尊き信仰はお前等に依つて壞らるべきものではない、我が信仰に比ぶればお前等は蚊みたいなものである」といふ風に信念の尊さを守持して行く所に、そこに佛敎の信仰といふものがある。信心はして居



るけれども、「さう言はれて見ればそんな氣にもなるし……、和尚さんの話を聴くと又その氣にもなりませす」……といふやうな事を言ふて居るからいかなしい、そんなお座なりの事は頸が飛んでも言へない筈である。「人間が死んで靈魂が消えてしまふ、そんなことを考へて居るやうな者は碌な者には成れない、それが泥棒や人殺しの卵になる、よう氣を附けなさい……」と一つボンとやらなければいけない。亭主が言はうが誰が言はうが、人間が死んで靈魂が有るか無いかわからぬなどと言つたら、「あなた、頭から水でも浴びて入らつしやい、釋迦如來の教を信する者に對して生命の永存を疑はすやうな事を言ふのは無禮ではありませんか」とやらなければいかぬ。ちようど日本の國民に對して皇室の尊嚴を嘲けるやうなことを言はれて「それもマア或はさうも言へませすけれども……」などと相槌を打つといふ事のあるべきものではない、さういふ所が日本人は非常にま

その業の力が自分の生れて行く未來に及んで行くのである。又現在生活の上でも、現在に現れて來るところの果報といふものもある、順現果報または順現業と申して、現在生活の上で現れて來るところの果報がある。いろいろ業が結果を引く時間の違ひはある。順現業と言へば生きて居る間に於て、その人が能く勉め勵んで正直にやつて行けば、社會の人から信用を受けるとか、或は貯金が出来て、老後に於ても幸福を受けるとかいふが如くに、その人が善根を積んで行く人であれば、いつとはなしに幸福がそれに向いて來る、その善根功德の力が死んでからでなく、生きて居る間にそれだけの果報といふものを受取つて行くこともある。それからこの世で受取らずして次の生に於てその果報を受取る場合もあるけれども、何れにしても業といふもの、結果である、悪い事をすれば悪い報がある、それは茄子の種を蒔けば茄子が生え、瓜の種を蒔けば瓜が生える、瓜

づい。けれども國民道德の方に於ては先づさういふ事は無いのである、皇室の事に就てそんな惡口などを言ふ者と一緒になつて相槌を打つ者は無いけれども、宗教の事になるとのんべんぐらり左様な事を言ふ。西洋の基督教などを信する人はナカ／＼そんな事は言はぬ、信仰を棄てたら言ひ出すだらうけれども、信じて居る以上は、人が何と言はうとも、苟且にも、蔭でも、内證でも神様の威徳に關はるやうな事は一言も言はぬ、それは威心なものである。モウ一つ大切な事がある、それはその心から出て來るところの業である、心といふものは生きて居るものであるから、それがはたらくのである、別に他から手を加へなくとも心それ自身が眼覺めてはたらく、はたらけばそこに仕業が現れて來るから、心の動き即ち行ひを生じて來る。その業が善い方と惡い方に岐れて行くものである、煩惱の方から行けば惡業となり、信仰の方から行けば善業となつて行く、

の種を蒔いて茄子は取れつこないといふが如くに、惡業の種を蒔けば苦しみの結果が現れて來る、煩惱が業を犯せばその結果も幸福は決して來らないといふことを考へて置かなければならぬ。随つて信心して善業をなせば、その結果は苦ではなくして幸福が來るにきまつて居る、それはモウ芽を出した時からきまつて居る、胡瓜の種を蒔いて置いて「オヤ／＼何が生えて來た、ナア何だらう、冬顔になるだらうか、或は都合好く行つてメロンがなるだらうか、メロンであつて呉れ／＼ば宜いが……」などと蟲のいゝこと言つても、胡瓜の種を蒔いてメロンがなつたりする氣遣いは無いのである。そこを能く考へて、メロンが取りたければメロンの種を取寄せて蒔きさへすればメロンが出来る、ナニも難かしい事はない。人はその通りに善業をなせば善果を感ずる。俗に正直正太夫といふ玩具がある、指の上に載せて動かすと、必ずこれが重い方へ落ちる、少しでも右の



方を重くして置いたならば必ず右の方へ落ちる。「おのれッ右へ落ちると承知せんぞ」……幾らやつても右へ落ちてしまふ、その行動の正直なることは秤の如きものである。正直太夫は私共の郷里では團栗に細い竹を兩方から刺して、その先に又團栗を一つづつ附ける、さうして真ん中に短い竹を刺して指の上に載せるとブラ／＼するものが出来る、これがなかなかブラ／＼して居つて落ちない、併し一方に團栗のチョット大きなのを附け換へるとバタリと落ちてしまふ、それは秤と同じ譯である。人間はちようどあれと同じ事をやつて居るのである、毎日々々やつて居ることが、今度は善業の方が些と重かつた、今度は悪業の方が重い……といふやうにブラ／＼やつて居る、それが平均して居るからどうやら保つて居るが、性の悪いお婆さんなどがやつて居る事は悪業の方がかり積んで居るのだから、終ひにはバタリと落ちてしまふ。それをたゞ阿彌陀様を信

じたならば、如何なる悪業を犯しても阿彌陀様の力で引張つて貰へるなどと言ふのは間違つた考である。佛様の有難い事を信すれば佛様が引張つて下されるといふことは、自分の心が今の優しい母親に出會ふて娘が喜ぶが如き心になり、さうして善根功徳を積んで行く上から救はれて行かなければならぬものである。佛は信するけれども悪い事も幾らもする、終ひには何とか又手で魚を掬ふやうな工合に、ボンと掬つて放り上げて貰ひたいと言ふ、そんな事を考へるのは邪道であります。

どこまでも因果應報の理を信じ、さうして自分の生命の滅せざるものであることを信する、この二つを根本に置いて行けば、所謂斷見外道、常見外道と言つて、佛が攻撃せられた、斷常の二見といふものを破ることが出来る。斷見外道は靈魂の滅亡を説くものであり、常見外道は因果の理を撥無して、如何なる悪い事をしてまはり同じ果報が得られる

と思つて居るものである。併しさうは行かぬぞ、靈魂は消えるものではない、因果應報の理は誰も狂げることとは出来ないと言つて、この斷見と常見に對して正しい教を立てられた、これを正見、正信と申して居るのであります。

さういふ風に心を決めて行つて、さうして己の力の足らぬ所は佛様の御力を仰いで、佛の御力と自分の力が加つてます。立派な生活を營んで、如何なる苦しい場合にも苦しみに負けぬやうに、誘惑にも引摺られぬやうにして行くのであります。それには日蓮聖人を手本として行けば宜しい、日蓮聖人はあの通り苦しい生活の中にも法悦を失はなかつた、いろ／＼な脅迫や誘惑があつたけれども、正義を守つて、最後まで間違つた方へはお出でなさらなかつた。日蓮聖人の一生は非常に楽しい生活であり、淨い正しい生活である、北條のやうな勢力に對しても、日本國民として勤王の正義を守らなければ

ならぬといふことを高唱された。さうして彼のやうな不利な境遇に陥つても満足をして居られた、彼の楽しい生活、正しい生活といふことを考へて、吾々はそのに倣つて行かなければならぬ。

ところがこの因果應報の理が簡単に信ぜられない人もあるけれども、そこを信じなければならぬと心掛けて始終修行を積んで行き居ると、だん／＼精神にハツキリと因果應報の理を信することが出来るやうになります。我國では安然和尚といふ人が名高い比叡山の大學者であつて、童子教といふ書物を書かれた、それは御一新文ですべてのお寺で手習をする手本であつた。それはどういふ事を書かれたものかと言へば、今の因果應報の事を教へて居るのであります。安然和尚は非常な碩徳であつたが故に、時の天皇が御歸依をなさつて、安然が貧乏で困つて居るといふことをお聞きになつて、大津から京都に入る三日間のいろいろな品物、それを代價に見積つて、



それだけの品物なり、金銭なりを安然和尚に供養してやるといふことを發願せられた。御承知の通り大津から京都までは三里ありますが、昔は皆大津を經て京都に入つて行つたものであるから、三日の間京都に入る物を貰ふといふことになればどの位澤山のものかわからない。所がその當日、三日といふ期日が来た時にどういふ有様であつたかと言ふと、非常な暴風雨であつて、一つも車が通らない、モウ夜半からドシ／＼雨が降つて、どんな者でも戸外は危く通れない、その翌日になつても荒れて居つて何も通らない、最後の三日目の日に、まだ雨は降つて居つたけれども、漸く雲を積んだ車が一台通つた、到頭三日間で藁一台といふのであるから、金銭に見積つたならば幾らでもないといふ結果に終つてしまつた。當時この事は非常な評判であつて、「安然和尚は三日間に貰ふ物と言つたら藁一台であつたさうな」といふことになつたから、安然は如何にも自分は果

報の拙きものであるといふことを愧ぢて、それから熊野の權現に參籠して一心に祈つた、實に安然は果報拙きものであるが、どういふ譯で斯ういふ事になつたかといふ前の生の因縁を知らうと思つて祈願を籠めた所が、その事が自分に感じて来た。それは前生に於て善業をしなかつた人間である、何等施しなどをしなかつた爲に、自分に恩を報いて呉れるやうな關係の有るものは一つも無い。ただ越後の或る山を越す時分に茶店で梨を食つた、梨をスツカリ食つてしまつたが梨の芯だけは食はなかつたものだから、芯をそこへ捨てた所が、蟻が寄つて来てその梨の芯を食つた、その芯を食つた蟻の中の一匹が今度人となつて京都の何處そこに生れて居る、それだけはお前の食つて捨てた梨の芯の少し美味い所を吸うた縁がある、それより外汝に縁有る者は無いといふ、實にどうも情けない身分であることがわかつた。仕方がない、それを訪ねて行かうといふので京都のそ

の人間の家を訪ねられた所が、梨の芯を食つただけでも兎に角縁があるものであるから、「ようお出で下さつた」といふので其處の家に置いて呉れた。それで安然も非常に愧ぢて其家に滞在在中に書かれたのが童子教といふものである。實に立派な文章のもので、御一新の後に至るまでも寺小屋に於て皆使つて居つたものである、今讀んで見ても文章も意味も洵に立派なものである。それはまア傳説であるけれども、やはり果報の拙ない者は高僧碩徳になつても困るやうなことになるのであります。

又涅槃經を讀めば、阿闍世王が白癩病に罹つて毎日々々気分悪く暮して居つた。家臣が「今日は御機嫌は如何でございますか」と言つて來る、「機嫌は毎日々々同じ事ぢや、今日は如何々々と言はれてもいつても気分は悪い、斯ういふ病氣に氣分の良い日があるものか」と言つて非常に怒つて居る。或る日の事、家臣が「今日は如何でございますか」と言つて

御機嫌を伺つて、又怒られるのかと思つた所が、阿闍世王は涙を流して、「今日は一つ聽いて呉れ、今迄は體が悪くてその事ばかり苦勞して居つたが、モウ體はどうせ腐つて行つてしまふ癩病に罹つて居る、それは諦めを附けた、モウ仕方がない、癩病に罹つた以上は不治の病である、幾ら薬を服んでも益らぬからモウ諦めた、けれどもこの頃熟々考へると、お釋迦様が、阿闍世は父を殺したり、母を座敷牢に入れたり、又佛に對しても惡逆を試みたから、彼は命を卒ると地獄に墮ちる、彼の目には視えぬけれども、今現に彼の惡業煩惱の罪は千本の劍となつて彼の體を取り圍いて居るから、彼は逃げることもどうすることも出来ない、一たび息引取れば直に捕つてその苦しみに遭ふ譯である、殺されても／＼蘇生へれば又殺される、逃げようとしても千本の劍が彼を取り圍いて居るといふ御説教なされたといふことを聞いて居る、それを聞いた時分には何を吐すと思つ



て居つた、ところが因果應報の理を信じなかつた阿闍世も、近頃はさうやらさういふ事があるかも知れないと考へるやうになつた、佛の説く所若し實なりとせば阿闍世はどうなるか、癡病で身が腐る位のこととは一遍だけれども、地獄に墮ちて苦しみ、それに千本の劔が俺を取り圍いて居つて、蘇生つても又殺され、遁れる途が無いといふことは堪まらない、百年、千年で終りを告げるかと言へばさうではない、轉々無數劫に亘るといふことはそれは逆もやり切れない話である、戰慄するやうな思ひをして来たと言つて非常な懺悔の志を起された。それからだんだん者婆あたりの話に依つて阿闍世王が善心に立ち復るのでありますが、あの阿闍世王の話を聴いても、非常に因果應報の理といふものは身に泌みて強く感ぜられるのであります。

親鸞上人が和讃の中に、「悪業煩惱形なければ人これをおそれず」といふこと謳つて居るが、これは非

常に良い語ちやと思ふ、涅槃經の阿闍世王の話から出た語だと思ふ、今は悪業煩惱の事が形になつて現れて居らぬから人は怖がらぬけれども、その罪を犯した事が直に形に現れて来たならばどれ程恐ろしいかわからぬ。

お互ひはその點に就ては能く考へて、佛法を信ずる以上は、善根功德は人の爲ではない、自分が善根功德を積めば皆永遠の幸福となつてそれが現れて来るのである。人間一生は永いやうでも短いものである、我が永遠の生命を考ふれば、どうしても善根功德を積むのが一番大切な事である。故に吾々は現在生活の上に於て苦しみを免れ、罪を遁れる上にも、この因果應報の理といふことに力を入れて行かなければならない、さうすれば死後の生活も亦済はれる譯である、斯ういふ事を能く考へて、佛法信仰の内容は生命の不滅と因果應報といふ二點にあることを確く信じて、人間は死んでも靈魂は消えない、死後

に於ては必ず自分に報いて来るのである、能く其點を味はうて、如何なる場合にも信念を動搖させないやうに、信力堅固に、金剛鐵石の如くにこの心を守つて行けば、それが己れの濟はるべき方法であると

いふことになるのであります。即ち如何にして濟はるべきかとは、信力強盛に、現在には苦海、業海を渡り、死後には常樂我淨の佛身を成就することを申すのであります。(完)

# 天風三萬里紀行 (其十五)

小林日種

## 十四、濟南、南京

六月四日

朝より出發の準備にて多忙で有つた。午前九時岩瀨氏の需めに應じてその家に往きて讀經した。岩井氏戸塚氏等も見えられ直ちに送別の宴に早變りした、雷められる儘に揮毫をなした。午後二時車站に赴いた、高原氏、高岡氏、甲田氏等の諸氏、民團を代表して見送られた。發車に際し、岩井老人より美事なる支那の珠數を贈られたので之を首に掛け莞爾

として出發した。

濟南驛にて  
 堯禹夏の時も有りしか老い拓榴  
 泰安にて  
 泰山のほどり壯なり三千里外の夕日  
 曲阜にて  
 周代の鋤のかたちよ麥の稔り

六月五日  
 柳の村の茂りにて見る、汽車の夜明け、徐州で夜が明けた、私は寢臺から起きてボーイの持つて來て



呉れた蒸タオルで顔を拭ひ、朝食を喫し乍ら初めて見る、そして是が恐らく見しまいで有らう所の山野の景を注視した。北支那の風物も最早や何時間かの後に盡きるのである。

此の邊には野外を彩る花片も無かつた。たゞ有るものは一望際涯のない高粱畑で、そして之を作る人は一体何處にゐるのかと云ふ疑が有つた。此の邊の川には提防などはない、水の有る所が即ち川であり、沼であり、水の無い處が畑であり稻田であつた。でなければ蘆荻叢生する荒野であつた。凡てが内地の旅行から受けるやうな、人臭い、こせついた處がない。山は皆屏風に描かれた南畫の遠望翠黛の山であつた。

固鎮を越え、壬城を過ぎる頃から更に柔かな江南の風景を呈して來た。或る村は柳の間に藁葺きの人家が埋もれたやうに建ち竝んでゐた。之が南畫の題なら滿村楊柳である。奇な處も人工的な處もなく全く自然そのまゝの書畫である。又、見渡す限りの葭原で、家も木も山もない處もあつた、又河の岸から突兀として岩石の山が立つてゐたり鐵のやうな大石

が河中まで踏ん張つてゐるやうな處もあつた。然るに四時近くなつて、突然、これ迄とはすつかり異なつた複雑な大きなシーンが展開して來た。私は眼早くも浦口の驛に近付いた事を知つた。

驛には、濟南から電報を打つて置いたので、南京實來館の番頭が出張つてゐて呉れて、連れ立つて、白ペンキで塗つた連絡船に乗り込んだ。斯くて楊子江の江上に浮んだ。

見よ！そこには、大河を挟んだ對岸約三哩も離れてゐるで有らう左斜めに長鯨の如く、河岸に迫つた丘陵が、複雑な大景の焦點で有るかの如く、折しも暮れるには早い黄昏の紅い陽を受けて何と云ふ素晴らしい鮮かな、スカイラインを描いてゐる事ぞ！さうして、猶も岸に近附くならば、間近まで激しく洗はれてゐるらしい赤土の斷崖の岸に、南宋畫に出て來るやうな丸屋根の小さい家や、ラグセイルを有つた。ジャンクや、緩やかに波うち乍ら迨々として續く長閑な青い野や畠や、丘陵や、頓馬な悠長な挽車の上で初夏の風に吹かれて行く村人等の如何にも無爲なる景象が展開されて行くのを見出さずには

ゐなかつた。

千里鶯啼綠映紅

水村山廓酒旗風

南朝四百八十寺

多少樓臺煙雨中

と、此の勝景を歌つた杜牧は流石に一代の詩宗である。

番頭の雇つて呉れた馬車に乗つて先づ江南に一步を印した。

馬車は舊式な箱馬車である。道路に丸石が敷いてあるので車が、ガタ／＼揺れて乗り心地が悪い。それでも暫くして城内の寶來館に着く事が出來た。

暑さは濟南ほどで無いが、蚊の多いのに苦しめられた。

六月六日

別段會ふ人も無い、又訪ねてみたいやうな人も無い。ツイ物臭くなつて午前中は家居してゐたが午後から思ひ切つて馬車を賃して見物に出てみた。

出てみてやつぱり家居するの愚と不經濟を悟つた。想像の如何に儚なく荒唐なもので有るかを知つた。實に百想よりも一瞥が尊貴である。最初に行つたのは中山陵であつた。中山道路に先づ度膽を抜か

れた。楊子江岸の下關から城内を貫通して朝陽門に達する約三里の間、二十何間幅の道が途中二ヶ所の計畫的屈曲をしてゐる外は一分一厘の狂ひなく、豪快に一直線につつ走つてゐる、その道をドライブして、朝陽門に達し、其處で車を棄て、先づ明の孝陵を探つた。孝陵は明の二世惠帝の工事に成るもので、明の太祖は元を破つて漢民族の主權を恢復した人である。此處から紫金山迄の距離は三十丁ばかりであるが、そのあたりは小丘が起伏し、北には碧い玄武湖があり、平原は西へ西へと波うつて廣がつてゐた。明陵は向つて左に紅く見え、巨大な動物の石像が點々と立ちほだかり、野原のまん中に宏大な煉瓦の門が屹立してゐた。それから二十丁ばかり離れた右手に當つて中山陵は明陵よりは餘程高い位置に眞白く壓倒的に聳えて見え、紫金山がその背後に屏風のやうにそば立つてゐた。此の山は樹木は殆ど無く満山岩石で築かれ、それが光線の工合で紫色に或は金色に輝く、紫金山の名は實にふさはしいと思つた。

中山墓、それは實に雄大極まる工事であつた。世



界の事は知らぬが東洋には是れ程大きな陵と云ふものはあるまい。紫金山の麓のかなり高い一つの山全體が陵の基礎であつて、それへ幅四五十間長さ數丁に及ぶ石の階段を設け、頂上に石造の巨大な廟が立つてゐる。廟は全部人造石の建築で約二十間四面位の大きさであり、屋根は青瓦で葺かれ、内部の柱は大大理石で天井や壁は五彩にいろどられ絢爛の美を極めてゐる。全體の様式は東洋風に西洋式を加味した明らしいもので、此のモダンな廟の前に立つて、遙かに變々たる南京城に相對し、五百年の風雨に曝された鼠色の城壁を望み見た時、そして眼路を更に曠原幾里、西へ西へと波うち、はては、遠山の翠微に融け込んでゐる雄渾無比な景色を俯瞰した時一種ロマンチックな氣持に誘はれずにはゐなかつた。

千七百有餘年の昔、吳の孫權が此處に都を建てた。明の都だつたのは五百有餘年の昔である。廣西から起つた洪秀全は此の城に太平天國の旗を立て、十年の間皇帝と稱した。其の世に謂ふ長髮賊の乱に逢つて南京は一炬にして焼き盡され、爾來、荒廢の極に達した。大陸民族の治亂興亡、英雄の事業の榮

木村泰賢氏は佛教研究の大方針として、先づ研究者の豫備知識に、漢文、散克利語、巴利語、チベツト語、滿洲語、蒙古語、英語の七ヶ國の言葉に精通する必要がある。コノ知識に依つて各國の言葉に譯されて居る佛教經典を参照すること、そこに眞の佛教の心持ちを味ふことが出来るであらう。と申されて居られる。

然うすると今の日本佛教の既成教團は漢譯の經典を基礎として形造られたお宗旨だから従つて大きな佛教の精神から觀ると或は支那臭ひ点がありはせぬかと思はれる。遺憾ながら日蓮主義も其範圍を脱することは出来まい。

併し又考へる、誤譯の經典に、或は枝葉末節の翻譯書に貴い時間を費すことの愚であること、それよりも原典なり正しき漢譯を精讀するに加かすではな

いか。

私は無學文盲にして各國の言葉どころか自國の言葉さへ完全に知り得ない。だが幼む時から寺院に育つたお蔭で支那、日本に於ける佛教の動きや、各宗の名僧智識の傳記位は心得て居るつもりである。私

枯盛衰、人は只、それを、荒れ果てた野の、もう、これ以上壞滅する事はない煉瓦や、石の部分だけが取り残されてる趾によつて、僅かに想像する事が出来る。

延長百三十支里あると云ふ南京城の城壁は長蛇のやうに蜿つて此の古都の神秘な夢を包んでゐた。

夜は番頭を誘ふて「夜秦淮に泊して酒家近し」の杜牧の詩で名高い秦淮の川に書舫を浮べてみた。それから「胭脂の鎔けて流れる」と謠はれてる桃葉渡の趾も見た。晝ならば汚ない下水のやうな水を面のあたり見なければならぬのでは有るまいかなど意地悪い想像をし乍ら……。

## 記 事

日蓮大聖人の  
六百五十遠忌を營みて  
能 仁 一 十

の今日まで觀た名僧の方々に釋尊中心の佛教を確立せんとして生命を賭して生涯を終始された宗祖に日蓮聖人を除ひて他に一人をも見當らないのを悲しむ。ヨソ日本の既成教壇が支那譯の經典を中心として發達した宗派であつたにしても、釋尊を大恩教主とし救世主とし絶対の本尊とすることに於て何處に謬りがあるか、散漫多讀しても眞精神を掴み得ぬやうでは甚だ無意義である、漢譯の經典すらも充分消化出来ない頭で各國語云々は矛盾である。コノ大卓見に於て日蓮大聖人の偉大さを私は常に痛感して居る。正當佛教宣布の使命を帯びて降誕したと云ふ日蓮大聖人、全く本地は上行菩薩なることを信ずる。

昭和六年は其大恩ある日蓮大聖人の正に六百五十遠忌に相當するのだ。私達も末弟として何とか意義ある報恩の誠意を献げなければならぬと考へて五年前に計畫を立て、少數の檀徒を督し或は托鉢行脚などによりて一萬數千圓を費してコノ荒廢しきつた精舎の復興を企て、一面に遠忌費として苦しき生活の



## 獨乙の野口日主上人よりお便り

(第十八信)

獨乙より一書申上候小生十月八日伯林に入り直ちにゾルフ閣下に會見(前駐日獨乙大使)基督教の前途に付高見拜聴、亦世界平和意見も承り、小生よりは佛教、日本佛教の大體を物語り候其後閣下より電話にて大學なり、有志者に講演する方宜敷かるべく、人を集むる勞は取る事の事に候へ共適當の通譯無之乍遺憾見合せ候、何處にても通譯に困り候、自分で話が出来ませなければ佛教の意味は傳へられませぬ、猶此後立派な布教師の二陣三陣出る事肝要に候、歐洲も佛教興隆の氣分僅にみなざり候。

一、伯林佛教ホーム、訪問(請待)茶菓の饗應に預り家族と共に佛教の小乗大乘を語り合ひ眞に法悦を感候、最後に家族の方々よりは是非此會館を佛教者に譲り渡し度旨被申候、小生は旅の空故何れ日本へ歸りて後可申上とて袂別致し候。

此ホームは伯林の紳士醫學博士ダルク氏(今は故人)佛教を信じ地を郊外フロナウに運び印度式

中より五年契約の五百圓積立貯金に加入し一路其目的の成就に精進して來た。建築は今年七月に完成を遂げた。積立金の五百圓はこの九月に満期となつたから此れを基礎として宣傳費二百五十圓を投じて全金澤百萬石の市民に呼びかけて、去る十月十八十九の兩日を選び井村日成親下御親修のもとに能仁事一親下並に教區先徳の御列席を辱ふして、いと盛大に殿修することが出來た。

由來私の寺は檀家僅かに二十數軒、殊に眞宗王國の金澤とて、參詣人の有無が第一に氣遣れたが、幸にして天候にも恵れ、兩日共に文字通り堂に溢るゝの盛大さで管長親下の御親教や能仁權大僧正の法談に加えて水也田吞洲先生の藝術に、日蓮大聖人の御聖徳を偲ぶ幾多の結縁を結んだことであらふ。

因みに金澤の各新聞は筆を揃へて『本長寺の六百五十遠忌』と題して恐くは金澤日蓮門下各派寺院に於ける空前絶後の參詣者であつたであらうと報道して居た。

(?) 佛教建築様式にて寺的會館を建立し同志と共に月數回集り佛教を研究せしホームに候、處もよし誠に日本佛教者の手に入る時は佛蘭西佛國寺と相俟て歐羅巴に佛教興立の基たるべし、此館は日本人も來觀せし人多かるべく存じ候、是又日本佛教の篤信家財産家の御一考御援助を爲法爲國願數ものに候。

一、伯林日本人會館に講演、人數は尠なかりしも萬里異境に志を立る人々集り大に心胸開拓の功を收めたりと存じ候。

一、ハンブルグ佛教會(白人集り)の招待に預り佛教座談會を開き候、小乗、大乘、小涅槃、大涅槃、世間、出世間、印度佛教、日本佛教日蓮主義各方面に渡り法談賑かに有之候、大橋師通譯被下候故殊に宜敷候。

一、ハンブルグ墓へ參拜、日本人及白人先亡靈を回向いたし候、墓はさすがに大規模にて公園式日本の多麻石以上かと被存候、日本國も祖先崇拜國故墓地は綺麗に心掛け肝要と存候、墓地の荒蕪は精神の荒蕪と存じ候、ハンブルグにても滞留日本佛

教の儀式及講演希望致され候へ共日限無き故殘念ながら引上候、丁抹、諾威、瑞典、巡錫。

農業の丁抹さすがに農業の丹誠に感じ候、木材の諾威さすがに森々、轟々、隆々の感あり、將來大に發展すべく被感候、鐵の瑞典第三四等國と思ひ居りしに豈圖らんや第一等の日本より富める様現代文化の現はれも立派なりと感じ候、都ストツクホルムにては日本公使館の畫餐に預り、新聞社の寫真に入れられ大學神學部の訪問に預り、滞在講演をせまられ候へ共是又日限無し惜しき袖を分ち候、布教は一年二年にては駄目に候、昔、日持上人の生還を期せざる所に感化あり、將來第二第三の日持上人爲法國出現を希望して止まず、歐米到處の山河佛教を迎へて居ります、先は一書まで小生は一兩日に巴里に返りマルセーユに出て印度に向ひ候。

祈各位御健勝候  
南無妙法蓮華經

十一月四日

伯林にて

日 主 拜



後援會各位 御中

伯林、瑞典等の新聞肖像封入、其他新聞に出て候へ共旅行中手に入らず瑞典ノルウエー地は北極近き故寒さ多く候、伯林は木葉落ちて幾分を残せり、獨乙は復興に忙しく人々血眼に奮勵致し居り候様見受候獨乙人は將來可忍民族と存候。

始めての布教は講演のみにては駄目、金も使はねばなりませぬ、つまり法施、財施、兼ねばなりませぬ、自分は三輪説法を應用致候、口輪は西洋言語出來ませぬ故に山河到處、御經、お題目を唱へ、他日の發展を祈り候(意輪)亦行處法服を着しアラユル人種に日本佛敎僧なりと觀じさせ、他日の結縁に致し候(身輪か)亦日本國を紹介の爲浮世畫をみやげに差上候處是又大喜びにて有之候。

以何之願眞實なり云云

(以上外に上人の新聞記事、寫眞、漫畫肖像等英文字新聞數種ありますが紙面の都合上略します)

磯部氏母堂逝去

生老病死の理を示すべく磯部氏母堂より子刀自は、十月三日輕微なる腦溢血に襲はれしが因となり、臥床三週餘日何等の苦痛なく遂に同月廿五日一同唱題裡に眠るが如く最後の好範を垂れて逝かる、嗚呼悼しい哉。十一月二日午前十時品川妙國寺に於て本多親下大導師の許に小西日喜、野老乾一、梶木顯正、山口智光、田口公信、齊藤昭行、高矢鉢教、山口正教、和賀義見等舊知の諸師並に各教團其他の有志多數參列し、極めて嚴肅莊重なる本葬が営まれた。弔辭として横濱法悦協會を始め小松川立正會、管塚立正會、統一團、報恩閣、市川立正會、日暮里讚仰會、同師會 局長第一等並に數多の弔電あり。左に磯部氏の諷誦文を録して聊か刀自の風丰と愛子の心情を偲ぶの便がとせん。

諷誦文

謹デ白ス諷誦一章 南無本門壽量之本尊 南無久遠實成大恩教主釋迦

牟尼佛 南無日蓮大聖人勅設立正大師等來臨影壽  
悉知照覽アラセ給へ  
今 悲母本修院妙實日成大姉葬送ノ儀典ヲ虔修スルニ當リ滿事等多年浴セシ其慈恩ヲ想フテ追慕ノ至情禁ズル能ハズ茲ニ蕪辭ヲ列ネテ報恩謝徳ノ赤誠ヲ披瀝シ奉ル

悲母俗名ハより子 嘉永六年十一月六日兵庫縣印南郡磐村多田家ニ生ル其祖ハ遠ク源家ニ出ヅ。悲母ハ祖母梅子ト共ニ顯本法華ノ正法ニ歸依シ夙ニ小林日至上人、本多日生上人ニ親近シ同郡志方村妙信寺姫路市妙立寺妙善寺ニ參詣シ數里ヲ往復シテ會テ聽法ヲ怠ラズ、後明治十四年ノ頃姫路市ニ住居スルニ至リテ益信仰増進シ又外護ノ事ニ努ム、兒等幸ニ正法ノ家ニ生レ幼少ヨリ朝暮ノ勤行ヲ共ニシ信心ヲ勸發セラレシモ愚鈍ニシテ内心遠ク他方ニ遁逝セントスルコト信解品ノ長者鷄子ニ異ラザリキ、遇々曩ニ嚴父ノ長逝ニ遭ヒ初メテ心ニ醒悟スル所アリキ

悲母ハ寡言實行ノ人、忍難不屈ノ女丈夫ナリ、三男二女アリシガ一男一女ヲ失ヒ我等三兒ノ養育甚

ダ謹嚴ニ寧ロ智力ト意思ノ二方面ニ超出サレタル人ト拜セシガ晩年ニ到ツテ仁慈ノ情頓ニ奮發シ信仰ノ至純愈昇進ス、前年法悦協會寒行會ニハ杖ニ倚テ磯子ヨリ遠ク三ツ澤ニ詣テ見ル者ヲシテ感憤興起セシメタリキ、常ニ曰フ「宗祖ハ天竺ノ靈山ハ移シテ此砌リ本朝身延ニアリト然ルニ今ハ甲州身延ハ移シテ品海城南ニ在リ、正法正義ノ正師ニ親近シテ速カニ成佛セシ喜ビ何ニカ比セン」ト不肖滿事等貧道ニ生レテ父母ノ孝養心ニ足ラズ日夜之ヲ憂念シツ、アルノ時恰モ最近一會社ヨリ辭ヲ厚シテ予ヲ招聘セントスルヲ聞テ悲母ハ甚ダ歡バズ「正法ヲ護持スルハ人中ノ最勝事ナレバ一家ヲ舉ゲテ道ニ殉ゼヨ」ト策勵シ給フノミナラズ自ラ少欲知足ノ範ヲ示シ法悦歡喜ノ情溢ル、モノ、如シ。悲母ノ病發ルヲ耳ニサレタル本多親下ハ特ニ舊情ヲ偲ビ左ノ御懇書ヲ贈ラル

拜啓 滿事様より承はり候へばこの度突然御發病の由驚入申候深く佛の教を信じ人生の事には驚かざる御覺悟有之候事とは存候もこの際一層に佛様の御慈悲に頼り又教の筋を考へ合せ心靜



かに信心奉行祈上候 身軀の加療は醫師のすゝめ  
に願ひ是亦充分静かに御加養祈上候 小生親  
しく御見舞申上度存活候も今少しは外出思ひに  
まかせず候も其内よろしく相成候はゞ親しく御  
見舞申上度と存居候

南無妙法蓮華經

十月七日

本多日生在判

磯部御母堂様

之レ親下ヨリノ最終ノ教化ニシテ悲母ノ悦ブコト  
限リナシ、發病ト同時ニ再起ヲ斷念セル母ハ死ヲ  
却テ迎フルモノ、如ク日夜些少ノ苦悶モナク顔色  
ハ日々ニ活氣ヲ呈シ眼ノ腫ノ清澄ナルコト明珠ノ  
如ク莞爾トシテ臨終既ニ近ケリト言フ、三兒數孫  
近親眷屬並ニ小西、和賀兩師等多數圍繞セル中ニ  
法華色讀ノ最後ノ範ヲ垂レ薪盡キテ火ノ滅スルガ  
如クニ安詳トシテ微笑シツ、静ケテ靈山ニ往詣シ  
給ヘリ時ニ昭和五年十月廿五日午後五時三十分ニ  
シテ世壽實ニ七十有八歳ナリキ  
嗚呼滿事等今ヨリ後家ニ入テ誰ヲカ拜セン何ヲカ

今兒等 教主釋尊ノ御實前ニ悲母ノ遺骨ヲ安置シ  
合掌シテ一心ニ尊容ヲ拜スルニ歡喜ノ情身ニ餘リ  
心性ノ惱ミ忽チニ息ム、經ニ曰ク「今此三界皆是  
我有其中衆生悉是吾子」ト又曰ク「令顛倒衆生離  
近而不見」ト又曰ク「若シ法ヲ聞クコト有ラン者  
ハ一トシテ成佛セザル無シ」ト又曰ク「善知識ハ  
大因縁ナリ」ト日生上人等永年ノ化導ニ倚リ悲母  
本修院靈ハ既ニ寂光ノ寶刹金剛ノ寶座ニ在テ嚴父  
ト愛弟三人面ヲ並べ悦び合ヒ給ハン、開目鈔ニ云  
ク「靈山ニ參ツテ返ツテ導ケカシ」ト感涙双頬ヲ  
濡シ復言フ所ヲ知ラズ  
茲ニ恭シク誦誦一章ヲ捧ゲテ以テ恩山ノ一塵徳海  
ノ一滴ニ擬シ奉ル 哀慙シ納受シタマヘ

南無妙法蓮華經

昭和五年十一月二日

鳳凰山葬儀式場ニ於テ

二男 滿 事 敬白

樂トシテ精進セン、心地觀經ニ曰ク「悲母堂ニ在  
レバ之ヲ名ケテ富トナシ悲母在ラザレバ之ヲ名ケ  
テ貧トナス」ト 又宗祖曰ク「殊ニ悲母ノ大恩報  
シ難シ」ト 兒等離別ノ凡情忍ビ難シ五牀ヲ地ニ  
投ゲンカ頭腦ヲ岩石ニ壞カンカ、從來朝ニ出デ、  
ハ恩師ヲ拜シタニ入ツテハ私宅ニ悲母ニ見ヘ一語  
ヲ聞テ終日ノ勞苦ヲ忘レ一切ヲ捧ゲ其悦ビヲ見テ  
喜ベルモ今ヤ已ニナシ、悲母ノ去ルコト順序タリ  
ト雖モ而モ兒等悲嘆ニ堪ヘズナドテ日生親下ノ大  
藏經要義完成ノ淨業滿願ヲ見ソナハシ給ハザリシ  
ヤト慟哭之ヲ久クスルモ遂ニ答ナシ噫 我ハ失ヘ  
リ噫 我ハ失ヘリ矣

往昔富木常忍居士悲母ノ遺骨ヲ頭ニ懸ケテ遠ク延  
山ニ詣ヅルノ時、大聖人云ク「我頭ハ父母ノ頭、  
我足ハ父母ノ足、我十指ハ父母ノ十指、我口ハ父  
母ノ口ナリ譬ヘバ種子ト果子ト身ト影トノ如シ、  
教主釋尊ノ成道ハ淨飯摩耶ノ得道、吉占師子青提  
女目健尊者ハ同時ノ成佛ナリ、是ノ如ク觀ズル時  
無始ノ業障忽チニ消ヘテ心性ノ妙運忽チニ開キ給  
フカ」等ト

### 小澤氏母堂長逝

市川立正會館小澤元重氏母堂みね子善女人は、去  
る初秋の候より第三回目臥床に就き専ら療養に竭さ  
れ一時小康を得たるも、遂に十一月十八日俄然病革  
り翌十九日午前十一時三十五分一族郎黨並に法縁の  
人師圍繞唱題中に溘焉として死去さる、寔に哀悼の  
情に堪へず。「花は根にかへり眞味は土にとゞまる」  
元重氏等の護法淨業に盡されつゝあるは現代稀有な  
る珍象と云ふべく、此の子こそ善知識なるか、此母  
にして此子あり。法號は 大徳院妙生日榮善女人と  
授與され葬儀は廿一日午後零時半より二時まで同會  
館に於て文學士小西日喜上人導師のもとに盛大に  
舉行され大僧正本多親下を始め小松川、笹塚立正會、  
報恩閣、本佛教會、日暮里讚仰會、法悅協會、眼鏡同  
業組合等の弔辭及各地の弔電ありて感慨無量なるを  
覺ゆ。茲に謹で弔意を表す。



## 河野通茂氏の訃

盛泰寺檀家總代河野通茂氏先般胃潰ヤウの爲め自宅加療中の處遂に十一月十九日逝去せられた、氏は夙に本多親下の教化に溶され盛泰寺統一閣の爲めに全家族と共に盡瘁されて居たが今此の訃に接して哀悼の情に堪へず謹で唱題す。

南無妙法蓮華經

## 發明的天才豊田佐吉翁逝去

織機界の偉人 名古屋豊田紡織株式會社社長勤三等豊田佐吉翁は昭和二年の春頃より腦病に罹り専ら静養を續けて居られたが遂に十月三十日午前十一時四十分不歸の客となられた、仍て十一月四日午後一時より名古屋市中區新榮町、教化會館に於て大僧正本多親下大導師の許に盛大なる告別式が營まれた。會する者實に一萬人を越へたと云ふ以て翁が如何に斯界の重鎮でありしかを視ふの一端ともなるであら

う、左に翁の生前奮闘小誌を掲げ謹で哀悼の誠意を捧ぐ。

一、生ヒ立ち 靜岡縣濱名郡鷺津町ニ呱呱ノ聲ヲアゲタノハ慶應三年春二月十四日デ佐吉ト命名サレタ、父ハ伊吉ト呼ビ律義ノオ百姓デ、母ハゑいと稱シテ極メテ信仰心ノ厚イ優シイ女性デアツタ。二弟アツテ長ヲ平吉、次ヲ佐助ト云フ此等三人兄弟ハ學歴トシテハ僅カニ小學校ヲ卒ヘタノミデアツタ、小學校卒業義務教育丈ケデモ伸ビントスレバ何程デモ成功出來ルモノダトイフ事ハ深ク御互ニ注意スベク「心甲斐ナケレバ多クノ能無用ナリ」ノ大キナ實例ヲ示サレテ居ル、寺小屋式デノ學業成績ハ秀才トイフ程デハナイガ、トテモ負ケ嫌ヒデ獨立心ニ富ンダ研究心ノ旺盛ナ霸氣滿々デ又極メテ無口ナタメニ附近ノ遊ビ友達トテ殆ンドナク獨リ雄大ナ理想ソレハ「大發明ヲシテ世ノ中ノ爲ニ盡サネバナラス、日本ハ農業本位デナク工業國トセネバナラス」トノ念願ニ萌ヘテ居タカラ村人達ハ之ヲ聞イテ「歌法螺ノ佐吉」ト綽名ヲ付ケテ寧ろ嘲笑スルノデアツタ。

## 二、織機ノ發明

環境ノ力ハ偉大デアアル、遠州木綿ノ産地ニ生育シタ彼ハ不斷ニ「バツタンはたご」ト稱スル極メテ原始的ナ手機械ヲ毎日見暮シ「此ノ子ハ變ナ子ヨ」ト笑ハレタガ而モ彼ノ胸中ニハ又此ノ不便ナ傳統的「バツタン」ニ誰一人改良ヲ加ヘヨウトイフ高尚ナ考ノナイ人達バカリヲ感ンダデアロウ。ソシテ此ノ織機ノ發明コソ天與ノ本分デアルト確信シ十九才ノ頃弟平吉ト共ニ出京シタガ不幸ニモ脚氣症ノタメ悄然トシテ歸郷シタ。勿論資力ノ頼ルモノナク又學力ノ不足カラ諸種ノ考案モ阻止サレ難澁ヲ極メタガ其度毎ニ意志ハ愈堅實サヲ増スノデアツタ。

努力ハ空シカラズ彼ハ廿五才ノ時一ツノ織機ガ完成サレ特許ヲ獲タ、コレニ續テ第二ノ發明ニ向ツタガ赤貧洗フガ如シデ最モ能キ味方デアアル親父サヘモ前途ノ不安ヲ感ズル程デアツタガ、彼ノ研究實驗ハ繰返サレ生活苦ニ責メラレバ更ニ發明ニ狂進スル熱心サハ遂ニ明治二十九年ニ至ツテ其發明タル木製織機ガ完成シタ是レ實ニ我國ニ於ケル動力織機發明ノ嚆矢デアアル、之ニ甘ゼズ續テ幾多

ノ困難ト闘ヒツ、研究ト實驗ニ勵ンダ。明治三十二年名古屋市武平町ニ二十餘臺ノ動力機ヲ据付ケタ試験工場ヲ設ケ傍ヲ織布ノ製造販賣デ若干ノ研究資金ヲ求メタ。三井物産ガ逸早ク之ニ着目シ翌年製品特約販賣ノ契約ヲ結ビ「井桁商會」ヲ創設シタガ之ニ安ゼズ益改良ニ努メタ。明治三十四年四月理想通りノ送出装置ノ發明ニ成功シタ、コレ即チ今日ノ自動織機發明ノ端緒デアアル。三十七年大阪木本鐵工所デ鐵製自動織機五百臺ヲ製造シ賣出シタ、而シテ其年更ニ緯絲補充装置及經絲停止装置ノ改良ニモ成功シタ。三十九年豊田商會ト改稱シ武平町カラ島崎町ニ移轉シ自ラ織布業ヲ營ミツ、一方織機ヲ製作販賣シタ。織機ニ對スル發明特許ノ數ハ次第ニ増加シ一方織機ノ前途有望ナルニ鑑ミ遂ニ明治四十年資本金壹百萬圓ノ豊田式織機株式會社ノ成立ヲ見ルニ至ツタ、現在ハ八百萬圓ニ増資サレテ居ル、之ニ由テ外國輸入織機ニ一大頓挫ヲ來サシメタ。明治四十三年五月歐米視察ノ途ニ就キ翌年歸朝シタ、爾來益改善ニ向ツタ。世界大戰前後ニ於テ製造販賣シタ普通織機ノ臺數



ハ十一萬二千二百臺、此中外國ニ輸出サレタモノ  
 四千五百台七拾六萬圓ニ達シタ。大正七年單身渡  
 支シ遂ニ十年十一月上海ニ六萬圓資本金一千萬兩  
 ノ大工場ヲ建築サレタ。其他刈谷工場、菊井、押切、  
 庄内等ヨリノ年産額ハ數千萬圓ニ達スト云フ。  
 普通機械デハ一女工ガ四、五台シカ受テツ事ガ出  
 來ナイガ翁ノ改良機ニ於テハ優ニ其十倍ノ効率ヲ  
 擧ゲ得ルト云フ。翁ガ明治二十五年カラ今日ニ至  
 ル迄ニ力織機、自動織機、環狀織機及其附屬具ノ  
 發明特許ハ八十三件、實用新案ハ三十四件ニ及ビ  
 日本ヲ始メ英、米、獨、佛、白、印、加、伊、丁、抹、瑞、典、  
 荷、牙、西、班、牙、澳、太、利、墨、西、哥、錫、蘭、等、全、世、界、ニ、及、ビ  
 特許權ヲ有シテ居ル、最近ノ昨年末ニハ有名ナル  
 英國「ブラットブラザース」社ニ對シ豊田自動織機  
 特許權ノ分權ヲ爲スニ至ツタコレ明カニ彼等ノ織  
 機界ヲ凌駕シタ證據デアアル。

三、翁ノ人格 苦勞ヲ積ンデ來タ翁ハ極メテ豊カナ  
 人情味ノ持主デ、又決シテ我が業績ヲ誇ルトカ名  
 利ヲ求メヨウトカイフ觀念ハ少シモナク全ク謙遜  
 ナ態度デ、眞面目ニ勤クト云フ外ニ趣味ハナイ、

發明ガ道樂デアツタ。大正十四年十月理想的蓄電  
 池發明獎勵資金トシテ金壹百萬圓ヲ帝國發明協會  
 へ提供シタヤウナ事モ人ノ知ラス間ニナサレテ居  
 タ。翁ノ功績ニ對シ明治四十五年五月藍綬褒章ヲ  
 授與サレ更ニ大正十三年二月藍綬褒章飾版ヲ加授  
 サレ、又昭和二年十一月勳三等ニ叙セラレ瑞寶章  
 ヲ授ケラレタ。翁ハ云フ「此世ノ中へ生レ出タ人間  
 ニ仕事ガナイトカ、職ガ求メラレナイトカイフ事  
 ハ決シテアルベキ筈ガナイ、元來仕事トイフモノ  
 ハ人カラ與ヘラルベキ性質ノモノデハナク、自分  
 自身ガ工夫シテ作り出スベキモノデアアル、コノ心  
 掛ナヘアレバ爲スベキ仕事ハ實ニ無限ニアル、年  
 中働キ續テモ決シテ仕事ノナクナルトイフ事ハ未  
 來永劫アリ得ナイ筈ダ、一ツノ仕事ヲ完成セバ次  
 カラ次ヘトイクラデモ仕事ヲ考ヘ出シ作り出セバ  
 ヨイデハナイカ、失業苦ダノ、就職難ダノトイフ  
 事ヲ叫ブ徒輩ハ彼等ノ中ニハ「コノ仕事ハイヤダ」  
 「コノ職ハ割ガ悪イ」コンナ下品ナ仕事ト「不平バ  
 カリヲ並べ立テ、仕事ヲ完成スルニ最モ必要ナ條  
 件デアアル」奮闘努力トカ「刻苦勉勵」トカイツタ事

ヲソノ仕事ノ計畫ノ中へ組入レテ考ヘナイ無氣力  
 不眞面目ナ態度デ只徒ラニワイノト騒グモノガ  
 少ナクナイ様思ハレル。何ツノ時代、何レノ所ニ  
 モ爲スベキ仕事ハ山程アル、中ニモ發明發見トカ  
 工夫創作トカイツタ世界ハ實ニ宏大無邊デ、人類  
 ハ未ダノ、ホンノ其ノ入口ニタツタ一歩ヲ踏ミ入  
 レタダケデアアル、開拓シ啓發スベキモノハ奥深ク  
 無限ニ秘メラレテアル。世ノ就職難ヲ叫ビ失業苦  
 ヲ訴ヘル連中ガ、自分ノ額ニ汗モ出サズ一足飛ビ  
 ニ高嶺ノ月ヲ眺メタイト願ツタリ、自己ノ手腕力  
 量ヲ過信シテ大キナモノヲ捉マウト望ンダリ自己  
 ノ職能ニ對シテ精一杯ノ眞劍味ヲ缺タリ、勞ヲ少  
 クシテ酬ラル、モノノ大ヲ考ヘテ其無理ナ希望ガ

滿サレナイト云ツテ徒ニ人ヲ恨ミ、世ヲ憤ルトイ  
 フ事ハ誠ニ不合理不徹底ナ考ヘ方デハナイカ」ト  
 吾人ノ共ニ服膺スベキ言葉デアアル、翁ハ實ニ此ノ  
 通りノ實行者デアツタ、我體験ノ告白デアアル、而  
 シテ此等ノ人生觀ハ翁ガ曆日ナキ多忙ノ中ニモ、  
 本多親下ニ親灸シ、懇ロニ正シキ信仰ヲ下種サレ  
 タ所カラ發芽シテアルモノデ「信ハ百行ノ本」ヲ見  
 逃ス事ハ出來ナイ、即チ信心ヲ身ニ讀ンダ人デア  
 ヲツタソコニ永久ニ光ヲ放ツテ居ル。翁ノ英靈ハ豊  
 田一家ヲシテ益正法ヲ擁護シ皆正シキ信念ニ安住  
 セシメ更ニ彌榮ヘシメラル、デアラウ。

南無妙法蓮華經

教 報

○東京統一團本部教戰錄

△十月廿六日(第四日曜)晴、午後一時半開會  
 兼定通リ山口智光師、田中道辨氏を講師と  
 して開會した、處が、朝鮮の横山基正師が

ヒョウコヲ來開されたので、久かた振りで  
 もあるしるので直ちに一席お願ひする事  
 にして都合三人で開會する事にした、横山  
 師の體験談やら修養感話を拜聴する事が出  
 來た事は全く意外のことであらう一同非常  
 に嬉しく感じた。

△十一月二日(第一日曜)雨、午後一時半開會  
 始めに法要次に講演會、

- 一、末法の機根と其の教法 梶本顯正師
  - 一、日蓮主義より見たる日本の佛教 中村清一氏
  - 一、日蓮主義者の四大教訓 和實義見師
  - 一、唯一の生きる道 小西日晝師
- 當日は本多親下御風邪の氣味にて欠座候て  
 右の同志に代講をお願ひして開會したので  
 あつたが、雨天にも拘はらず來會者七十餘



名であつた。

△同日午前中上野公園道路布教

出席講師は松岡林造氏、大關庄太郎氏、梶木顯正師、磯部謙事氏外に村田顯明君奉仕

△同日(第二日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 梶木顯正師 一、喜ひつゝ進む 小西日喜師

△同日(第三日)晴、午後一時午開會

最初に法要次で講演會 本多總裁祝下 一、佛本行集經を拜して 本多總裁祝下

△同日(第四日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、志願力の開發 山口智光師

△同日(第五日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第六日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第七日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第八日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第九日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十一日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十二日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十三日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十四日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十五日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十六日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十七日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十八日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第十九日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第二十日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第二十一日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、現身說法の困難 山口智光師

△同日(第二十二日)晴、午後一時午開會

て梶木師外二三氏の應援の下に街頭宣傳を開  
當し大いに効果を収めた。

○正法寺使便り 牛込區早稲田南町五五

十一月九日毎月例會第二日曜日午後七時朝か  
ら雨が降つたり止んだりの中をメカホン隊五  
時より出勤聴衆八十餘名。

木村敬之師 野澤一郎氏

科擧の世界から常住の御相を拜して 野澤一郎氏

人格完成の眞意義 眞正 木村日保師

神奈川教况

○十月十九日原水町淺岡雜貨店前に於て教化  
の根本思想を法華經に求むべしと説いて日蓮  
上人をとほしたる本佛釋尊の慈悲を擧げその  
夜南毛利村本堂寺に日蓮上人の一代の活動は  
吾等大衆の人間の自覺を喚起せしむる聖業な  
る所以を述べて三百餘の聴衆に深い刺激を興  
へた。二十日夜原水町より四里の北地牛原公  
會堂に女子青年團の總會に於て日蓮主義は哲  
理に根ざし宗教の基礎に建てられた教にして  
迷妄なる俗信にあらず根本信に生きて個性反  
び社會を淨化する正法の徳教なる所以を論じ  
て百七十餘名の女性の心臓に何ものかの響き  
を加へた。二十一日原水町大飯屋料理店前に  
現代に生活する人々の苦悩は日蓮上人の廣大  
なる活ける氣分を味へば即時に清算し得べし  
と疾呼して發心の動機を強めた次いで中依知

佛會會議日本婦人團體代表川崎靜子女史の來  
講を願ふこととして小西上人と共に御講話  
をお願ひした、講題は川崎女史「ハワイに  
期待して」小西日喜師「不滅の靈響」因に當  
日は雨天であつたが來會者百六十餘名、  
向來會者一同には施本と供物を例に依つて  
早上した。お會式の献花は例年地明會の方  
々にお願ひするので本年も又復例の如く去  
る十八日午後から統一團に參集して造花に  
熱中式場の裝飾等は一切梶木師の考案に  
由る。外に當日御寶前生花一對地明會、御  
鏡餅一重團員山本和子持御寄附下さつた。  
茲に謹んでお禮申上げます。

△同日(第三日)晴、午前中上野公園道路布教

出席講師は松岡林造氏、梶木顯正師、磯部  
謙事氏等獅子吼された。

△同日(第四日)晴、午後一時午開會

始めに法要次で講演會 高矢休教師 一、志願力の開發 山口智光師

一、現身說法の困難 山口智光師

來會者六十餘名、和賀義見師も來會され

○顯本寺使便り 本郷區嘉菜町三十五

十一月十三日 聽衆滿堂盛會であつた

我が觀たる日蓮主義 大關庄太郎氏

土鏡御書講義 池澤 山主

教育勸語と法華經 森川 日修師

因に十二日夜七時より有町東京貯蓄銀行前に

式辭

秋光法流山頭ニ輝キ慶雲雲霧菊花  
薫ルノ佳節第五布教區管事溝口會  
旭師、蓮照寺木村義明師、長福寺  
北田信昌師ヲ特ニ聘シ並ニ檀家總  
代人、檀頭、會檀、檀信徒ノ參列  
ヲ添フシ本日ヲトシ當山本堂修理  
玄關改築竣工ノ式典ヲ舉行ス回顧  
セバ講堂五十九代永昌院日受上人  
元文中ニ玄關ヲ新造セラレテヨ  
リ爰ニ壹百八十餘年ノ星霜ヲ經タ  
リ其間修繕ヲ企ツルモ時熟セズ實  
ニ修繕ハ多年ノ宿望ナリシガ漸ク  
大正十五年四月七日檀家總代人、  
檀頭、會檀諸氏ト屢々協議ヲ重ネ  
タル結果三ヶ年繼續事業トシテ昭  
和二年七月四日ヨリ起工シ同四年  
一月廿四日工事ノ完成ヲ告グ其使  
用延人員八百五十餘人、而シテ檀  
家一統ノ熱誠ナル外護ト喜捨セラ  
レタル金參千八百餘圓也又工事費

等金參千五百七十餘圓也檀信徒二  
百餘ノ信念ノ結晶ト云フベキナリ  
願フニ當山開基日肝上人乃至日受  
上人等並ニ檀家祖先累代諸聖靈ノ  
隨喜ト報恩ノ功德ヲ聊カ積ミ併セ  
テ位隣大覺轉凡成聖ニ擬ス、抑モ  
寺院創立ノ起源ハ今ヲ去ル三千年  
ノ昔釋尊在世ニ於テ印度五大寺院  
ノ中竹林精舍ガ佛教最初ノ伽藍ナ  
リ即チ釋尊成道後ニ頻婆娑羅王ノ  
寄進ニ依リ建設セラレタルヲ以テ  
權輿トス故ニ寺院ハ天下公衆教化  
ノ道場ナルハ勿論之レガ構造設備  
ヲ懈タリ若クハ破損シ置カシカ宗  
教上ノ生命タル信仰ヲ滅殺スルノ  
ミナラズ地方ノ風教ニ影響ヲ及ボ  
ス實ニ渺少ナラザルナリ幸ニ佛祖  
諸天擁護ノ下ニ檀信徒一統ノ淨キ  
巨額ノ寄進ト協心戮力寺檀一致以  
テ落成ノ宿志ヲ貫徹シ舊觀以上ニ  
復シタルハ檀信徒ノ資モノニシテ  
衷トニ喜バシク威銘禁ズル能ハザ  
ルナリ故ヲ以テ更ニ教化活動ニ微  
力ヲ盡シ諸彦ノ深厚ナル信念ト芳

千葉教報

△本國寺本堂修理立開改築落成式舉行

十一月二日本國寺本堂修理立開改築落成式を  
舉行す全體家を招待し來會者百八十餘名第五  
布教區管事溝口會旭師、本郷町寺院木村義明  
氏、北田信昌師其他の僧員參列奉告法要修  
士屋山注式結願禮、工事委員三木仙藏氏の工

運生寺にて自己の本質に目覺めんとするもの  
現代社會の危念を救はんとするものは日蓮上  
人の教に聽くべしと論じて四百餘の大衆に信  
念的靈火を點じた。二十七日鎌倉驛前に於て  
現代文化の缺陷暴露の實相を見るにつけ日蓮  
奮闘の靈地に住める鎌倉人の眼を許さずい  
ざ法を知り國を思ふ人々は共に握手して起つ  
べしと叫んで百二十餘の聴衆中には熱度を高  
むるものもあつた。十一月三日明治節を慶祝  
するのために原水町に於て街頭宣教を行ふ福要  
の地三ヶ所に明治大帝の偉徳大業を敬讚し民  
衆の自覺奮起を促がした聴衆四百七十餘。十  
二日夜飯田本興寺に於て日蓮上人御入滅報  
恩會を修行法要後三浦師の前講に次いで生活  
内容の充實法華信仰の最善道徳を説いて六百  
餘の聴衆に正義信仰の把住を精進を促がした  
のである。十八日原水町大飯屋を會場として  
機師會を開く教學上重要な觀門を講明して  
正明の信仰を傳へた。

かくて吾等の叫びが佛祖の照臨に導かれて歩  
一步健全に進み行くことであらう。(三上生)



志ニ願フ事ヲ志願ス冀クハ正法興隆國運隆昌伽藍常住寺檀益々繁榮能所安泰斯ノ淨業結縁ニ因リ盡未來世ニ至ル迄同ク寂光ノ實刹ニ遊パン事ヲ謹デ祈ル者也

維時昭和五年十一月二日  
法流山第二百四十五嗣法  
權僧正 土屋 賢生

祝詞

本國寺本堂修理及同玄關改築工事を竣へ爰に落成の式典を擧げらる幸慶何物か之に加へん。  
史を案するに此地元八峰廿八谷具に備はり正に印度の靈鷲山にも似たらん最勝の境而して文明の昔眞言宗の我法華に降伏せるに當り妙法の永へに流るゝに擬して山を法流と名け釋尊の本土を象りて寺を本國と號せりと、ア、祥瑞の表徴蓋多くは其比を見ざるべし、宜哉元和の初め山内に大檀林を開き幾多の學寮を設け碩德學匠の輩出する者勝けて算ふ可らず盛也と謂ふ

御門天皇ノ文明三年五月十五日權大少都日肝上人(品川本光寺九代)佛陀一代ノ骨髓タル法華大道ノ統一的教化ニ浴シ改宗シテ法流山本國寺ト更ム(境内二千九百四十五坪)  
建築物ノ本堂敷坪百〇五坪、庫裡敷坪百五十坪餘、客殿敷坪六十五坪、寶藏七坪、鐘樓二坪餘、山内表門屋根瓦葺四柱ノ大門高サ二丈通用口中二間餘其前面ニ高サ一丈五尺ノ大石塔ヲ備フ、竿ノ長サ八尺三寸、巾二尺四寸、墓石高サ六尺餘、祖師堂、開山堂、六角堂、大藏經二千百十六冊ハ現存ス。  
京都總本山妙滿寺直末タリ。  
畧歴一爾來寺院隆盛ナルニ隨ヒ末寺二十二ヶ寺、塔中十二ヶ坊ヲ有ス、天正十九年辛卯十一月徳川家康寺領十石ヲ寄ス、元和八年壬戌ニ及ビ總本山三十世、當山十代佛眼院日純上人、関老久世廣宣ノ紹介ヲ得テ時ノ將軍二代秀忠ニ謁シ允許ヲ請ヒ檀林ヲ創設ス(富士大

べし矣。然るに國家社會の變革は宗教界に激變を伴ひ維新の初年縣廳を當所に置かるゝや先づ堂宇を以て其の廳舎に充て參差たる老杉鬱蒼たる巨木を倒す等風致を損傷せしこと言語に絶せり此一事以て時代の實相を語るものにして即ち人は日に信仰に遠かり寺院は月に經營の難を覺ゆるに至れり。  
當山主土屋僧正赴任以來寺門の維持向上に銳意努力せられ植樹營繕等々々面目を新たにす所あり殊に本堂の破損と玄關の頹廢を憂ふる事久しく曩日之れが修理改築の計を立て淨財を募りて工を起し夙夜孜々として自ら之を督し終に能く今日あるを得たり實に其擧や宜に適ひ其勞や多大也、吾等幸に斯勝縁に當む當山を以て菩提の靈場となし而して今日の盛運に會し祖先累世の精靈が莞爾として眼前に彷彿たるものあるに鑑み欣快の情抑へ難きものあり以此吾等は山主の勞に對し深く感謝の意を表するも

石寺、越後本成寺モ本檀林ニ學ブ)即チ日什門派僧徒教養ノ大學林ニシテ世ニ之ヲ宮谷檀林ト稱セリ、學寮四十餘、且ツ各種ノ教場等設置アリテ設備ヲ完フセラル。  
初期ニ於ケル歴代ノ能化及學頭等ハ初代佛眼院日純上人、二代自然院日信法印、三代靜明院日乘上人(越後本成寺)、四代本通院日遠和尚、五代日盈上人(富士大石寺十七世)、六代養德院日乘上人、七代啓運院日要上人、八代再職日乘上人、九代再職日要上人、十代唯心院日俊上人、已上能化。以下略ス。  
檀林ノ編制、名目部、初級、教授、檀林ノ五老、條簡部、次級、教授、同四老、集解部、三級、教授、同三老、指要部、四級、教授、同二老、法華玄義五級、教授、同一老、法華文句上級、教授、同能化、能化ヲ講主ト稱シ本國寺ヘ輪番住職ス、一老ヲ玄能ト稱シ俗ニ番頭ト呼ブ、文句ノ部ヲ終リシ者ヨリ十八人ヲ選ビ中座ト稱シ、法華止觀

のなり。  
想ふに風致及建築等の莊嚴美は自ら人をして襟を正さしめ所謂土石說法物心融合に資すること大なるべく即ち形體より精神への本門戒檀の活法門も亦這裡に存せん歟但し殿堂輪奐を極むと雖も萬一法味の之に副ふものなからん乎恰も月に光なく花に香なきに等しく單に一片の形容に止まり信仰の活眼として見るに足らざる事固より言を俟たず。  
山主土屋僧正尊下希くは益加餐自愛せられ多難なる末法化導の天職と靈蹟振興の淨業に向ひて愈精進あらむ事を。聊か所感を陳べて祝詞に代ふ。  
昭和五年十一月二日  
法流山本國寺檀家總代  
岩 佐 春 治 敬白

法流山本國寺

緣由一當山ハ往昔眞言宗ニ屬シ善興寺ト稱セシガ人皇第百二代後土

及ビ天台ノ觀法等樞要教義ヲ講究ス、日蓮聖人述作ノ錄内錄外等ハ兼學ト稱シテ此ノ部ニ於テ學ブ、初級ヨリ玄能ニ成ル迄三十餘年ヲ經過シ玄能ヲ勤メタル後四五年ノ中ニ能化ニ進ム。  
實ニ當山ハ輪番地上總十ヶ寺ノ一ニシテ教團ノ中樞ヲ占メ興學ノ盛ナリシ推テ知ルベシ、明治維新後ニ至ル迄日什門寺六百有餘ヶ寺ノ學徒修學ノ爲メ雲集シタル者約一千有餘ト云フ、故ニ幾多ノ名師哲匠輩出シ國聖日蓮ノ立正安國ノ大義ヲ四方ニ開導シ以テ天壤無窮ノ皇國ヲ翼賛シ奉リ、帝國文化史上ニ貢獻セラレタルハ古往今來世人ノ熟知スル所、加之ナラズ初發心ノ者ハ新談義ト稱シ法華經(一人一品宛)ヲ暗誦スル法式ヲ嚴格ニ修メ得道ノ因ヲ當山ニ植ヘザレバ什門派ノ僧員タル事ヲ許サズル法規ナリ、爰ヲ以テ上總宮谷檀林ノ名聲江湖ニ噴々タルモ宜ナル哉斯ノ光輝アル歴史ヲ有スルハ千葉縣ニ



於ケル宛カモ印度ノ靈山、支那ノ天台山、日本比叡山ノ如キ觀アリテ現今ニ及ベリ。

△秋季朝日講開催

十一月三日秋季朝日講を開催す午前十時開講法要最修午後一時より土屋山主の致教(現代人の悩みを教ふ人は誰れか國難日蓮の外なしと大衆人の處世觀を懇示す)世間相之信仰信は功徳の母なり時代相木村 義明師木村 弘英師木村 春治師滿腔の熱血は室内に迸發し五百餘名の聽衆は靜慮感涙の極あり近來稀に見る處なり且つ地方藝術の餘興盛に演ぜられ夜を徹して廢版を極めたり。

伊勢教信

△十月八日四日市第六小學校兒童見學團約二百名の爲に安樂寺に於て安樂寺の沿革と信條 田久保本誓師△十月十二日永村追分教會所に於て宗祖日蓮大聖人御會式を最修す午後二時より講演 聖祖の御法難に就て 原田日勇僧正△同日午後七時より講演及び清興あり 阿賀 日貫師 田久保本誓師 信仰の輝き

次で小林盛水師の薩摩琵琶、今村、北岡、水谷諸氏の三曲合奏の餘興ありたり△十月十三日安樂寺婦人會例會 聖訓摘要 田久保 山主

大阪教報

○十月二十二日堂園寺にて法華經要義 京藤 布教師○十一月二日蓮成寺にて龍口法難會を修し不惜身命の弘教 大泉 師○日蓮聖人の悲訓 中川 僧正○八日開寺にて談話會 京藤 師○十日堺妙滿寺にて三世一貫の大道 大泉 師○十一日中ノ島小學校にて社會生活の態度 中川 師 水也 田氏 苑 君○十二日堂園寺にて御會式法要後 京藤 山主 熊井特命布教師 攝受折伏 中川 僧正○十三日蓮成寺にて御會式法要後 中川 僧正 顯本法華の信仰 因に道敷當地岡島版上兩氏の謀介にて強信の士故友廣香天氏嗣子忠正醫學士と本多現下の和子嬢と婚約なり十一月十五日蓮成寺御寶前にて中川僧正導師の下に京藤大泉二師副導師となり最應なる法要を修し中川僧正の教示ありて華燭の式典を擧げ十六日友廣家にて盛大

福井教報

○十月十二日 今庄町 善壽寺ニテ教育と宗教 白部 泰學師○十月十二日午後七時 妙經寺御會式 如設修行抄の一節 長 美明師○十月十二日午後八時 妙正寺御會式 善壽寺ニテ 池上御入滅に就いて 藤 啓純師 池上御入滅に就いて 兒玉 山主○十月廿二日 今庄町 善壽寺ニテ 家庭宗教に就いて其一 白部 泰學師○十月廿四日 今庄町 善壽寺ニテ 家庭宗教に就いて其二 白部 泰學師○十月廿七日 今庄町 善壽寺ニテ 家庭宗教に就いて其三 白部 泰學師○十月十三日午前十時 妙經寺ニテ先聖の遺風 長 美明師○十月十一日午後八時 水行寺ニテ龍口御法難に就いて 藤 啓純師○十月九日 福井妙純を御會式 兒玉 日見師○十月十三日午後八時 天晴會 藤 啓純師 受持法華名者 已上

山陰通信

○十月五日 鳥取市法泉寺 聖祖と神儒佛三道 高田 日暢師○十月二十五日 鳥取法泉寺 國家的宗教 高田 日暢師○十月二十六日 鳥取地明會 婦人之自重 高田 日暢師 (松本報)

佛敎座談會 高田 日暢師○十月八日 鳥取市方町瀧山氏宅 信仰之中心 高田 日暢師○十月八日 鳥取觀和會館 平和之根本 高田 日暢師○十月九日 鳥取東町廣江臺治氏宅

日蓮主義座談會 高田 日暢師○十月十日 鳥取智頭街道岡田辨太郎氏宅 正義之信仰 高田 日暢師○十月十二日 鳥取法泉寺 靈界之主師親 高田 日暢師○十月二十一日 鳥取市外宮下村區長宅

誌料領收

自昭和五年拾月貳拾壹日 至同拾壹月貳拾日

右難有入帳仕候也

御注意

愈歳末決算も切迫仕候に付帶封に未收入の年月御注意申上候向には護法の爲め何卒御多用中恐入り候へ共添付振替用紙折返し御利用願上度候 恐々

- 一金拾圓也
一金貳圓貳拾錢也
一金四圓四拾錢也
一金參圓也
一金壹圓貳拾錢也
一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓四拾錢也
一金六圓也
一金貳圓貳拾錢也
一金參圓六拾錢也
一金壹圓貳拾錢也
一金貳圓貳拾錢也
一金參拾錢也
一金貳圓貳拾錢也
一金八圓也

Table with columns for location (e.g., 大阪, 千葉, 同, 福井, 大泉, 福島, 山梨, 札幌, 大泉, 神奈川, 豊橋, 大阪府, 東京, 神戸) and amount (e.g., 大阪立正結社實業會殿, 風月三藏殿, 片岡別荘殿, 岩本初造殿, 遠藤實照殿, 安達正玄殿, 大野日通殿, 本澤隆正殿, 水野榮殿, 田村佐太郎殿, 關戸旭殿, 加藤豊三郎殿, 山乃神傳道園殿, 粕谷重造殿, 熊井本光殿)

「統一」會計



# 年賀廣告は如何です

誌友の新年御挨拶に御利用の爲め新年號に賀詞交換欄を設けて置きます

御申込締切は當方十二月十五日限り

申込所

東京府品川町妙國寺

統一編輯局

## 價定一統

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半年	金壹圓貳拾錢	送料共
一年	金貳圓貳拾錢	送料共
全年	金四圓貳拾錢	送料共
全年	金四圓貳拾錢	送料共

## 料告廣一統

表紙	一頁	金貳拾圓
一頁	拾五圓	
半頁	九圓	
四分	五圓	
一分	金	

昭和五年十一月廿四日印刷納本 (第四百二十九號)  
昭和五年十二月一日發行

神奈川縣横浜市磯子區磯子町廣地一四八

## 製複許不

編輯兼 磯部 滿 事  
發行人 鈴木 日 雄  
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地  
印刷所 都 都 印刷所 電話高輪六〇二四番

發行所

統一發行所

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

振替東京五一〇七一番